

愛媛大学教育学部

第120号

# 同窓会報



愛媛大学教育学部同窓会事務局

☎ 790-8577 松山市文京町3番  
愛媛大学教育学部総務係室内

☎ (089)927-9383(直通) FAX(089)927-8304

E-mail : dosokai@ed.ehime-u.ac.jp



ご挨拶



高橋 治郎

愛媛大学教育学部  
同窓会会長

同窓生の皆様、お変わりございませんでしょうか。寒かったかと思えば急に暖かくなったり、「もう雨はいらん」のに雨の日が続き日照時間が極端に短くなったりと、変な天候の昨今です。しかし、長い目で(地質学的に)見ればちよつとした気候の揺らぎにすぎないのでしよう。とは言っても、老人手帳を持つ身になると、身体が気温変化についてゆけず着るものの選択に苦労しています。ついこの前までは、だれよりも早く半袖のシャツに衣替えし、木枯らしが吹き出しても小学生に負けじと半袖でおした私ですが……。さて、戦後七十年目にあたる今年、三月に卒業生・修了生が巣立つてゆき、四月には学部・大学院に新入生を迎え、入学式前からキャンパスは賑やかとなりました。正門を入った図書館前に人工の川が造

られるなど新学期が始まるのにふさわしい学内環境になり、さらに桜が咲き乱れ木々に新芽が芽吹いています。そうした中、各サークルは部員の確保に躍起になって、新入生にピラを配ったり話しかけたり、勧誘をおこなっています。大学生協も学生マンシヨンや下宿(死語になりつつありますが)の斡旋、生活用品や学用品、教科書等の販売に大忙しです。

この四月から大学執行部が、柳澤康信学長体制から大橋裕一学長体制に代わり、補佐体制も一新されました。これまでにない変わりようです。平成十六年に大学が法人化して以来、大学予算が毎年削減されるとともに、文部科学省から大学改革を求められ、愛媛大学も人件費や研究教育費の削減、教育や研究のさらなる充実と地域貢献、各学部のあり様、そして学部改組や新学部設立など様々な努力をし改革を検討してきました。来年度には新学部が発足し、我が教育学部も学生と教員数が減り、これまでとは大きく様変わりする予定です。同窓会として頭の痛いところが多々あるのですが、これらについては別の機会にご報告することにします。愛媛大学も大学として生き残るのが大変な時代になりました。

こうした大学改革が求められる理由の一つは、我が国の少子化にあります。私たち団塊の世代は、年間「オギャー」と二百四、五十万人が生まれてきたのですが、最近では百万人ちよつとしか生まれていません。ですから教育学部はその影響をものろに受け、教員の採用数が激減しているのです。愛媛県においては南予、そして東予の島しょ部を中心に小中学校の統廃合が進みそれに伴い教員数減が続いています。高等学校もほぼ全員が中学校から進学する時代ですから生徒の絶対数が少なくなると、学級減や分校化、そして定員割れが続く学校は廃校へとゆかざるをえない状況になってきています。

一方、愛媛県下の各高校は生徒諸君を成績や偏差値によって進路指導するため、愛媛県で教師になりたい生徒が我が教育学部に入學してこず他大学の教育学部等になってしまふという実態もあります。教員採用数が少なくなるうえに他大学から愛媛県の教員として入って(帰って)こられるのですから愛媛大学教育学部としては立つ瀬がありません。今や県下の高等学校はもとより小中学校の中には、我が教育学部の卒業生が一人もいない学校があるという現実があります。寂しい限りです。

こうした中「先生になりたい人は愛媛大学教育学部へ」とか「愛媛大学教育学部の卒業生がこんな分野で活躍しているよ」、さらに我が教育学部の学生・院生のレベルアップにと、様々な企画や取り組みを教育学部同窓会や同窓会支部、同窓会有志がおこなっています。

す。こうした取り組みや催し物の実施報告はそのつど同窓会報に掲載されていますのでお読みいただき、同窓会支部として、あるいは有志で「私のところでこういうことができる」という企画がありましたらお知らせください。

昨年、同窓会のあり方や懇親会の持ち方等について各卒業年度の同窓生からご意見・ご提案をいただく会を開催いたしました。様々なご意見・ご提案をいただき、これらを昨年夏の同窓会懇親会に反映させ、大勢の参加者に喜んでいただきました。また、同窓生の皆様から、支部活動へのご提案や支部独自の地域貢献の催し物の開催をはじめ学部学生や院生へのサポートなど、常日頃、様々な形で同窓会の活動や運営にご協力、ご支援いただいています。本当にありがとうございました。今後とも変わらぬご支援よろしくお願いたしました。常任理事や理事、各支部の正副支部長が、同窓生のご要望に沿うように同窓会の運営に当たっていますが、基本は同窓生一人ひとりのご意見を尊重し、最大多数の同窓生にとって意義のある同窓会活動をおこなうことが肝要だと考えております。学舎を同じく付き合っつてゆきたいと考えています。来(二〇一六)年は、教育学部の前身校である愛媛県師範学校が創立されて百四十周年にあたります。このお祝いも含めて同窓会懇親会を開催しようと思えます。様々な企画をお寄せください。そして懇親会で、校歌や学歌、寮歌をみんなで歌い、旧交を温めましょう。

同窓会活動をおこなうことが肝要だと考えております。学舎を同じく付き合っつてゆきたいと考えています。来(二〇一六)年は、教育学部の前身校である愛媛県師範学校が創立されて百四十周年にあたります。このお祝いも含めて同窓会懇親会を開催しようと思えます。様々な企画をお寄せください。そして懇親会で、校歌や学歌、寮歌をみんなで歌い、旧交を温めましょう。

目次

表紙 奥定 一孝  
「襲」 菊川 國夫  
「ご挨拶」 高橋 治郎  
「幼児教育との出会い」  
心響 中村真紀子  
「学部の今」 3  
研究室訪問 音楽教育研究室  
「田邊 隆先生 今日日は」  
「わくわくチャレンジサタデー活動」 久米  
東雲・八坂  
学内最近のニュース 7  
「平成二十六年度日米国際学術交流合同成果報告会」を開催しました  
教育学部の安積京子講師がドイツでデュオコンサートを開催しました  
表紙作品「襲」について 9  
職場だより 9  
「表現すること 楽しむこと」  
教育学部附属特別支援学校教諭 宮城 由紀  
「心ある教師を目指して」  
四国中央市・金生第一小教諭 高田 友美  
「新たな土地で」  
松山市・立岩小教諭 吉川 紗希  
「勝負の年」  
東温市・西谷小教諭 渡部 好紀  
「感謝の心と笑顔を大切に」  
西条市・西条南中教諭 中川 典子  
「年を取れる幸せ」  
喜多郡・内子中教諭 川野 博章  
「音楽と共に」  
愛南町・城辺中教諭 北條 志保

# 幼児教育との出会い

教育学部附属幼稚園副園長

中村真紀子

(昭五七卒)

思いがけないご縁で、愛媛大学教育学部附属幼稚園で勤務させていただいています。機会をいただきましたので、教員生活の終盤になつて触れた附属幼稚園の保育や幼児教育と出会つて感じたことをまとめてみました。

## 【遊びを通して学ぶ】

幼児教育の世界に接して一番心に響いたのは、幼児は「遊びを通して学ぶ」という言葉です。幼児期の子どもたちは、好きな遊びを十分に楽しむ中で、人生に必要な様々なことを学ぶという意味です。

例えば、製作遊びをしながら、道具の使い方や作り方を学びます。友達を見て、見よう見まねで取り掛かり、失敗を繰り返しながら、何回も何回も挑戦する中で、



道具の使い方を知り、思い通りの作品を作り上げた喜びを味わいます。

周囲と関わり始めると、自分と違う友達の考えに気づいたり、トラブルを経験したり、様々な葛藤を味わったりしながら、人との関わり方を学びます。また、集団遊びを通して、協力や分担のよさを知り、ルールの大切さを学び、我慢することを覚えます。

この「遊びを通して学ぶ」というのは、好きなことを追究する中で、自然に多くのことを学んでいるということ、学びの理想の姿だと思えました。



## 【主体性が重要！】

附属幼稚園では、幼児の主体性を大切にしています。幼児はいつも、好きな遊びを好きな場所で好きな友達と好きなだけ楽しみます。「今日は何をして遊ぶか」は自分で決めます。教師は「手伝ってほしい。」と言われれば手伝い、「○○が欲しい。」と言われれば準備をしますが、あくまでも幼児自身が選んで遊び始めることを大切にしています。

幼児は、自分で好きなことを見つけて遊ぶことで、主体的に行動することを体験し、身に付けてい

きます。失敗しても何度でもやり直せること、工夫するともっと面白くなること、友達と協力することを経験します。自ら行動を起こせば思いが叶うという経験は、将来つまずいたとき、自ら立ち上がる力や工夫してやり遂げる力、自分ができるという自信や周囲と関わる力を育てていると感じます。

幼児教育に出会うまでは、小学校へ入学する以前に、様々なことを皆様に経験させておいて欲しいと思っていました。入学後では遅いと感じることがたくさん(逆上がりや縄跳びなど)あったからです。でも今は、たくましく生きるために「主体的な学びの種」をまいておくの方がもっと大切だと思ふようになりました。

## 【太陽のような温かさで】

保育に当たる先生方を見ていると、インソップ寓話の「北風と太陽」の話を思い出します。北風が、太陽に「旅人のコートをどちらが先に脱がせるか競争しよう。」と持ち掛け、強い北風を吹き付けます。旅人はコートを脱ぐどころか強く抑えてしましますが、太陽が温かく照らすと、汗を拭いながら旅人がコートを脱いだという話です。

幼稚園の先生は、いつも幼児に寄り添い、幼児の心に共感する温かい言葉を掛けていて、本当に感じします。

特に幼児が友達とつながり、集団で遊ぶようになると、けんかや様々なトラブルが頻繁に起こるようになりますが、幼児から話を聞



く時、幼稚園の先生は「○○君はいやだっと思ってたんだよね。」とか「○○ちゃん、今日はすごく頑張ったね。偉かったよ。」と、まずはその子に寄り添った温かい言葉を掛け、幼児に共感してから話を進めます。すると、幼児のかたくなな心は自然に解きほぐれ、表情が和らぎ、やがて納得して素直に行動するようになります。

幼児も「○○しなさい。」とか「ダメでしょ。」など、北風のような厳しい言葉では、心を切り替えることが難しいことでしょう。まずはその子に寄り添うという基本を見習いたいと思います。

幼児教育についてはまだまだ勉強中ですが、幼児教育と出会えたことは私の財産になりそうです。

790-0056

松山市土居田町  
三三三八一―一六〇一

「言葉のチカラ」

西予市・野村高教諭 坪倉 寿徳

「勇気を行動の友とする」

かすがいジャパン(株)代表取締役 菅 宏司

先輩を偲ぶ…………… (18)

林傳次先生遺稿集「把翠」を繙く(十二) 文芸…………… (19)

川 柳「傘寿のつばやき」東澤 孝

絵手紙「鳥や草花と共に」田中 勝子

俳句「ふるさとの春」佐々木皓一

短歌「老いと介護」森貞 和雄

会員の声…………… (21)

「教育の再生」再考 吉原 宏文

「蒲池先生のお名前が目がとまり…」 森川 絃一

「八十八ヶ所遍路で四国文化を学ぶ」 小野植元幸

同期会…………… (24)

昭和三十三年卒業生同期会 村上 嘉一

学部トピックス…………… (25)

松山市立久枝小学校の1/2成人式

記念品制作「藍染めハンカチに手形で抜き染め」を行いました

・今治市教育委員会と連携協力事業の調印を行いました

・教育学部留學生歓迎会を開催しました

同窓会支部長会報告…………… (27)

叙勲・受賞…………… (18)

寄付者・会報送料送金者名…………… (30)

敬 申…………… (30)

原稿募集…………… (22)

寄贈図書紹介…………… (30)

放送大学後期入学生募集…………… (23)

愛媛大学と山形大学で

「第五回卒業・修了合同美術展覧会」を開催しました…………… (31)

学部  
の  
今

## 研 究 室 訪 問

## 音楽教育研究室

田邊 隆先生 今日



陽光に心なしか春の兆しを感じる四月の中旬、田邊先生の研究室を訪問しました。

先生は県下の音楽教育は勿論のこと教育学部の中核として活躍されていらつしやるとともに、昨年度末まで、愛媛大学教育学部附属小学校の校長先生をされて、超多忙の毎日を通り過ぎています。その中であつて大変無理なお願いをし、貴重な時間を空けて頂き、その間隙を縫って訪問しお話を伺いました。

先生は、前述の通り、附属小学校長をされていましたが、十四年前にも附属中学校長として四年間活躍されていました。従つて、附属小中学校教育を通じて、教育現場の事情を先生の豊富なご経験に基づいて鋭利な知的感性でもって多角的、多面的に俯瞰的な視点でお話を伺うことが出来ました。

教育実習生などを通して見えてきた、現代学生気質について

今の学生は、実に真面目だと思います。昔は、例えば、平気で廊下でもサッカーをする学生が、音楽専攻生の中にもいました。その当時と比べたら今は、紳士？淑女？が多くなりました。だから、或る意味で、学生の生活指導上では、気を遣うことが少なくなりました。又、昔の蜜カラ風な学生は見かけなくなりました。その代わり、よく言えばお坊ちゃま、お嬢様タイプの学生が増えてきたのかなとも感じます。

一方、今は精神面への配慮や気配りが、いっそう求められていると思います。以前は「何やってんだ！」と、突き放す様に言つて、それで済んだ世界がありました。が、今は、教員の方で学生のメンタル面で深く配慮している傾向が見られます。皆大切に育てられて

きたのでしょうかね。

今の教育実習生について

全国的（全国の教員養成大学）に、教育実習全体のカリキュラムが充実し、かつてとは異なる様子です。と、申しますのも、学部と附属の連携・連絡が密になり、教育実習の質的向上がはかられていると思います。

今は、各教科の指導教員が丁寧に事前指導したり、実習カリキュラム委員会が関わり、積極的、精力的にガイダンス面など細かい点まで指導しています。その成果は、附属学校側から見ても強く感じます。

例えば十四年前に附属中の校長をしていた時は、学部には実習カリキュラム委員会などはなく、実習生と附属校園に任せていた様に思います。附属中の先生方が、教育実習の学生の生活面（挨拶・近隣道路でのマナー等）にまで指導



しなければいけないことが多々ありました。今は、学部の事前指導により、附属も助かっていると思います。

以前（附属中）の実習生が教科等で子どもに揺さぶられて、「もう教員としての自信がなくなりました。」と深刻に言ってくる学生がいました。又、小学校では、全教科を担当するので、教科によっては、指導教員からいっそう専門的な指導を厳しく要求され、非常に悩み自信を失うという事例もあり、評価面でも、厳しい評価がなされた時代でした。しかし、附属の先生方は、実習生をよく見ているので、附属の評価は、自信ある評価・評定だったと思います。

附属学校、教員について

附属での学校行事や児童生徒の主体的な活動の様子を見ていると、大変に質的な高さを感じました。これも、附属の先生方が自らの研究目標を確りと持ち積極的に熱心に実践研究をし、それを研究的、実践的に試していく。そこには知的な教員集団が在り、個性的な仲間が在り、お互い厳しくて切磋琢磨する集団の中から生まれ育つていく姿がみられました。だから他の学校の研究熱心な先生方からは大変魅力的に映り、児童生徒達と、強い信頼関係を築いたのだと感じています。

附属学校に於ける児童生徒、各分野の先生方の表現、作品等に接

するにつけ、質の高いものがありました。以前こんな事が附属中でありました。それは、理科の先生の机上に、緻密に描かれた観察記録のデッサンが置かれていました。実に精密な静物を模写したもので、私はてっきり美術の提出作品だと思い美術の先生に伺ったのですが、理科の先生が、それは理科の観察作品ですよと言われ、驚きました。それぞれの分野で学んだ事を、子ども自身が総合していた様に思えます。あらためて、総合だの言われなくとも、子どもには自然に総合して表現する力、学力が身につけていると思えました。

附属中では、今も学担が二、三年と持ち上がっていくシステムが続いています。だから生徒同志や教師との絆が強くて深いものがあり、卒業してもそれが続いていく様子が伝わってきます。

ところで、今の教育現場に於ける先生方の学校生活の様子から感じるのですが、ますます迅速な対応が求められる時代となり、教材研究、校務分掌は当然のことですが、トラブル処理の時間が多くなつてきたのも、附属学校が例外ではなくなつた印象を抱いています。

時代が変わつたなら、変わった  
なりの知恵を

「以前はこう言うことが出来たのに、今は出来ない。」と言う考

え方ではなくて、「昔出来たことが、今出来ない」とすれば、どういう形に変えたら、昔と同じ様な事ができるのか。」その「同じ」ということは、同じ手法でやれというのではなく、そのことに関して知恵を出せるかにあるのだと思っています。

それは、時の流れとともに状況が変動しているのですから、当然同じ事は出来ないことは分かっています。例えば、以前にあった教師集団と保護者とのあの独特な仲間意識とか、先生と生徒とのあの絶妙な人間関係とか、こういうものを今実現していくためには、現在の社会情勢では、どういう知恵を絞ったら出来るのかと言うことですね。その良い例が、この十数年間の愛媛大学の附属学校PTAの姿にあると感じます。個人のお名前を出して恐縮ですが、「熊本・平塚」両氏を中心とした、この十数年間の活動にあると思います。両氏は、「附属の先生方が、教育・研究に専念して頂けるような環境作りを」が、口癖でした。

ますます変化する中であって、人間関係能力は不可欠に思えますし、知恵を出し行動まで至ると、影響が大きいです。

附属には、長く勤務されている先生もいらつしやるのですが、「昔は、研究協議会などでは、奥歯に物が挟まった様なことは言わないで、言いたいことを歯に衣を着せずに、ずばずばと言う。それは研究そのものの中身であって、其の人の人格は決して否定はしない」といった内容を後輩に言う姿を目にすることがあります。

いつの世も先輩は、「最近の若い者は……」といった言い方をしているのでしょうか、「お互いが切磋琢磨して高まっていくぜ。」もちろん、「あなたが必要としてくれるなら、惜しまずいくらでも言うよ。」と、後輩の役に立ちたいのだと感じます。そんな人間関係があると、世代間がうまく回転していくのかなと感じます。

よく学生に言っているのですが、「私は駄目ですから」「自信がありません」などと、度が過ぎた控えめな？、遠慮を感じることはありません。その多くが、事前に備えていない場合が多いのではないかと思います。

備え続けている事でしょうか、自信は生まれれないのだと思います。「私は駄目ですから」「自信がありません」と考える時間があれば、備え続ける時間に向けた方が、精神

的にも楽になると思います。「ペー トーヴェンも、生まれた時は、楽譜が読めなかったし、ピアノも弾けなかった。」と、「学問に王道無し」と言いますが、学生と接する度に、自分にも言い聞かせている次第です。

#### 現場と大学の関係……ささやかな提案

講習会などに招かれた折に、「この様な授業を構想したが、こんな教材があればいいと思っているのだけれど、教材を作る時間が無い。」といった現状を伺うことがあります。夢物語にも思えませんが、このような教育現場の希望を、大学側が受けて、関係する先生のゼミなどで、教材を作成（試作）して、提供する事が出来たらと思います。

現場の先生方は、構想やアイデアがあるが、時間が不足している。一方、学生は、現場のニーズが何かが分からない。しかしじっくり取り組む時間がある。学生が作成した試作品？を実践で用いることで、ヴァージョンアップも含めて、より教材の有効性を高める研究が出来る。この双方がチームを組み、双方がメリットを感じる関係ができればと思っています。

実際、メーカーに頼むと経費がかかりますから、それを現役学生が受けて、実体験と捉えて、学生達から「先生からの要望をこんな

風に創りました。」と連絡する。それを受けた先生達は現場でそれを実際に授業に生かして行く。

この様なことが上手くいくと、現場の先生達は助かるし、現役学生も「ああ、こういう授業の時はこういう教材を現場では必要としているのだな」と言うことがよく分かり、益々意欲的に取り組もうとする態度が芽生えてくるのではないか。だから学生をいい意味で巻き込んだ現場＝大学の組織というものが出来たらなあと思っています。

しかし、あり得るのは、本当に現場の要望、ニーズに反映できるかどうかだと考えます。その時はきつと現役学生の立つ位置は何処にあつて、何を知っておかなければならないか等の実践研究が大学と学生に要求されることになりま

す。大学には最先端の機器類や機種や備品、それだから出来る教材作成というものがあると思います。また、時間を掛けなければ出来ない教材というものがあると思うのです。そう言うものを創るのは、専門の学生の演習の一つとして成立させ「この教材を誰か創ってくれませんか」とアクセスできるホームページ、すなわち「教育現場からのリクエストボックス」という箱があつて、そこに教育現場から「〇〇学校の△△と言う者ですが、この様な授業をするのに、

この様にやっていきたいと思っています。その為の教材を創って頂きたいのですが。どうかよろしくお願いします。」の様なメールが入って来る。そうすると、担当者が、関係部所へ打診し、話が進むという流れです。現在も大学の本部にそのような問い合わせが来て、私の所にメールが回ってきたことがありますが、専用のコーナー（箱）が設置される日も近いかも知れません。その後の現場の授業にどう生かされたかについて、現場からも情報が届くと、作成した学生達が観て、「ああ私達の創った教材がこの様に実際に生かされているのだなあ」と、教材研究の大切さ、教えることの素晴らしさ等を感動を伴い、積み上げていく。

私は、このような夢が実現できたらと願っていますが、そろそろ退職の年齢になってしまいました。

先生の豊かな教育経験から話される内容は、大変斬新で引き出しが多く、その情熱を以て熱く語られるお話に何時の間にか引き込まれていって、時の経つのも忘れてしまいい約束の時間を過ぎてしまっていた。

(インタビュー 菅田)

# わくわくチャレンジサタデー活動

## 子どもたちと学び合う学生の活動報告

「つながり」をテーマとした  
久米わくチャレ活動報告

四回生

に、わくチャレの活動でつながったものをパズルのピースに書き、一年間を通してパズルを完成させ、様々な人やものとのつながりを大切にしてきました。

特に、久米わくチャレは地域の方とのつながりも強く、久米小学校から徒歩約十分程度にある農園で五月には芋の苗植えを地域の方に教えていただき、十一月にはみんなで芋を掘り、焼き芋にして食べる体験もさせていただきました。子どもたちからは「大きいおもいがとれたり、ちいさいおもいがとれたりして、とても楽しかった。」「自分たちでほったおひもはべつのよりいちだんととてもおいしかった。」という感想がありました。



子どもにとっても貴重な経験をさせていただいています。地域と連携した様々な活動を通して、学生は地域を生かした教育のあり方について体験的に学べる活動となっています。

今年度もたくさんの方との「つながり」を大切にしながらも新たに、「学生と子どもの共通目標として、「伝え合い」「助け合い」「学び合い」ができるような関係づくりを目指しています。わくチャレで出会った仲間を大切に、わくチャレで出会った人や活動から多くのことを学べるような活動にしていきたいと思っています。

子どもどうしや子どもと学生の間関係づくりに関しては、わく

チャレ創設時からお世話になってる児玉健次先生からたくさんのお言と支援をいただきながら、昨年度から少人数の生活班をつくり、安定した環境づくりに努めました。子どもたちは、わくチャレの活動を通して、大学生の先生や違う学年の友だちと関わりながら過ごしています。学生はわくチャレという一年間の継続的な活動を

通して、子どもたちと向き合い、学校運営や学級運営についても考えながら、日々学びを深めています。これからも、この活動を運営していく上でご協力をいただいているたくさんの方への感謝の気持ちを忘れず、学生も子どもも楽しく活動を続けていきたいと思います。



私は二回生の時から愛媛大学フレンドシップ事業の「久米公民館わくわくチャレンジサタデー（わくチャレ）」に参加しています。久米わくチャレとは、久米小学校の五、六年生を対象にしている活動で、小学校の先生方や保護者の方々、地域の方、大学の先生方のご協力の下、学生が主体的に活動を企画運営して行っています。主な活動内容としては、子どもどうしの人間関係づくりを目指したミニゲーム、子どもの自主学習の学習指導、学生による子どもたちが体験的に学ぶことのできる授業、体育館や外で思いっきり体を動かす遊びの時間の四つがあります。活動は月に一、二回程度、土曜日の午前中に行っており、現在、学生十三名と、児童四十五名の総勢約六十名で活動し、今年度で十年目という節目を迎えました。昨年度は「つながり」をテーマ

「人間関係づくり」と  
「居場所づくり」を目指した  
東雲・八坂わくわくチャレ  
活動報告  
四回生

愛大・東雲・八坂わくわくチャレ  
レンジサタデー（以下、わくチャレ）は、愛媛大学教育学部の学生が中心となり、企画、運営させて  
頂いている活動です。学校の先生  
方、保護者の皆様、公民館の方々  
のご協力により、今年で十年目を  
迎えます。毎月一回、土曜日に東  
雲・八坂小学校の五、六年生の希  
望者を対象に、大学生がわくチャ  
レの先生として、授業をしたり、  
一緒に遊んだりしながらふれあい  
を深めています。場所は、子ども  
たちの移動の安全等を配慮して、  
校区の境界の青少年センターで  
行っております。学校の壁を越え



た交流を通して、「一人ひとりの  
人間関係づくりの機会」として、  
また「子どもの学校・家庭以外に  
おける居場所づくり」を目指しつ  
つ、さらに将来中学校に入学した  
ときの人間関係における不安を取  
り払い、小学校と中学校のスムー  
ズな橋渡しに貢献できることを目  
指しています。

活動は、毎月授業、遊び、チャ  
レンジレンジという三つを企画し  
ています。

「授業」では、学生が授業者と  
なり、学びの楽しさを感じられる  
授業を展開しています。国語、算  
数、社会、図画工作、家庭科等さ  
まざまな教科の授業を考えていま  
す。国語では俳句の鑑賞、社会で  
は地域のオリジナルマップづく  
り、図画工作では、発泡スチロー

ルのみで未来の動物を創り出すこ  
とに挑戦しました。授業の際には  
指導助言の先生に見て頂き、さら  
に後に研究協議をしています。そ  
のため、大学生にとっても非常に  
学ぶことの多い活動となっていま  
す。

「遊び」では、大学生と小学生が、  
一緒に体や頭を使いながら取り組  
む遊びを毎回行っています。昨年  
度までの活動では、ドッジボール  
や鬼ごっこ、フルーツバスケット  
などよく知られている遊びはもち  
ろん、「インベーダーゲーム」や「オ  
レ色に染める」などの個性豊か  
なゲームも考えています。学校の  
休み時間で普段するものとは違う  
「遊び」になるように、どれもルー  
ルに工夫を加えています。

「チャレンジレンジ」は、人間  
関係づくりを目的とした活動で  
す。グループエンカウンターや協  
同作業を通し、コミュニケーション  
スキル



の育成を  
図りつ  
つ、仲間  
を認め、  
自分を大  
切にする  
気持ち  
を育いま  
す。昨年  
度は、風  
船を使っ

た自己紹  
介ゲー  
ム、ペア  
での四コ  
マ漫画  
づくり、  
ボール流  
しゲーム  
などをし  
ました。



最初は、人前で話すことに抵抗を  
感じていた様子の児童や他の学校  
の児童とは話さないという児童が  
多く見られました。しかし、回数  
を重ねるにつれて発表したり、他  
の学校の児童にも応援の声をかけ  
たりする様子が見られ始めまし  
た。このような姿が見られたとき  
には、本当に嬉しく思いました。  
わくチャレは、一年間の継続した  
活動です。よって、このように一  
年間を通して子どもたちの成長を  
見ることができのりも大きな魅力  
だと思えます。

三つの活動の他に、季節に合わ  
せた行事も考えています。秋には、  
遠足にいきました。昨年度は愛媛  
大学で行いました。ここでは「避  
難中」と題し、大学中に散りばめ  
られたさまざまなミッションをク  
リアしながら宇宙人から逃げ切る  
というゲームをしました。大学に  
は他学部の学生もいます。安全面  
に配慮しながら日程決め、場所の  
確保をするには頭を悩ませるこ

ともありましたが、小学校、公民  
館、大学など多くの人に助言を頂  
き無事終えることができました。  
クリスマス時期には、クリスマ  
スに関連した活動と、プレゼント  
を用意しました。その他にも、運  
動会、卒業式などの行事を企画し  
ています。

月一回の活動に向けて、週に  
一、二回学生が話し合いをしてい  
ます。今年度も、より充実した活  
動になるよう向上心をもって取り  
組んで参ります。



## 「平成26年度日米国際学術交流合同成果報告会」 を開催しました【4月24日(金)】

### 学内最近の ニュース

平成27年4月24日(金)、総合情報メディアセンター1階メディアホールで、昨年度実施した海外研修プログラムの「日米学術交流合同成果報告会」を開催しました。

今回の報告会は、昨年度に引き続き3回目となります。同日に開催された国際連携推進機構主催の「Study Abroad Fair」の後、それぞれのプログラムに参加した学生たちがプレゼンテーションを行い、留学に関心のある本学附属高校の生徒たちや学生、教職員ら約30人が熱心に報告に耳を傾けました。

教育学部では、国際的視野を備え、文化的多様性を理解することができる学生を育成するため、学術交流協定締結校であるワシントン大学バセル校(UWB)およびルイジアナ大学モンロー校(ULM)と短期学生交流を行っております。平成26年度は、それぞれ2月下旬から約2週間訪問しました。

最初に、竹永雄二教授から、UWBの「Diversity体験プログラム」についての概要が説明され、参加した学生8人による報告が行われました。学生たちは、ワシントン大学やマイクロソフト社におけるDiversityへの先進的な取り組みの視察、現地の高校での1日体験、UWBの学生たちとの交流などを通して、自分たちの文化や社会を見つめなおし、「帰国した後に何をすることが大切である」ことを学んだ等の発表がありました。

次に、富田英司准教授から、ULMの「教育文化視察プログラム」についての概要が説明され、参加した学生4人による報告が行われました。学生たちは、研修中に起こった様々なアクシデントや、アメリカの子どもたちへのプレゼンテーションでの体験等を紹介し、異文化の中で学ぶ貴重な機会になったと発表しました。

最後に総評として、教育学部国際交流委員会委員長の小助川元太教授が、「留学の目的はそれぞれだが、とりあえず一歩踏み出すことが大切。実際に行ってみると、想像していた以上に色々なことが分かり、今回発表した学生たちのように、実施前後では明らかに自分が変わったことが実感できるはず。それこそがこのような海外実習体験の良さではないか」とまとめました。

教育学部では、今後もこのような海外の大学との相互交流型プログラムに力を入れていく予定です。なお、今回の合同成果発表会については、愛媛新聞(4月25日朝刊)にも取り上げられました。



ワシントン大学バセル校について報告



ルイジアナ大学モンロー校について報告

## 教育学部の安積京子講師が

### ドイツでデュオコンサートを開催しました

平成27年3月8日(日)、教育学部音楽教育講座の安積京子講師が、ドイツ・バイエルン州にあるホーフ市で開催されたコンサート『ヴァイオリンとピアノのための歌』で、ドイツ人のヴァイオリニストと共演し、フランケンポスト新聞 (Frankenpost Zeitung) にて高く評価されました。

安積講師とヴァイオリニストのツォルニツァ・バハロヴァさんは、2004年、2005年にドイツ国立ワイマール・フランツ・リスト音楽大学で共に学んだ学友です。バハロヴァさんは、数多くの国際コンクールで入賞しており、カーネギー・ホールやロイヤル・アルバートホール等の世界的に有名なコンサートホールで演奏する一流のヴァイオリニストです。現在は、ニュルンベルク・フィルハーモニー管弦楽団のコンサートミストレスを務めています。安積講師とバハロヴァさんは、ドイツやチェコでコンサートツアーを行うなど数多くの共演を重ねており、昨年4月には、大阪市(帝国ホテル)と松山市(いよてつ高島屋9Fローズホール)でもコンサートを開催しました。

二人は今年の3月にミュンヘン市のスタジオで演奏を録音し、6月には、ドイツのレーベルORPLID社からデュオCD『ヴァイオリンとピアノのための歌』をリリースする予定です。

平成27年3月10日(火) フランケンポスト新聞(記事の一部抜粋……)

歌—無言の、だが多くを語る

「歌」と名づけられているが、歌詞はない。実際、ヴァイオリン奏者は、歌うように、激情をこめて、半分はまるで陶酔しているかの如く、半分は咎めているかの如く、音をつくりあげていく。また、より選び抜かれた日本人の共演者も、ひと目で見渡せるが、かなり印象付けられている聴衆に、ピアノを色々な雰囲気でも歌わせることができるということを、この夕べの間に何度も証明していく。……

……ヨハネス・ブラームスの北ドイツ風の飾り気のない叙事詩と理性的な繊細さはこのヴァイオリン奏者の気性に特に近いものがあるのかもしれない。二人の演奏家はブラームスのソナタ『雨の歌』作品78を、強調と男性的な簡素さの間のバランスをうまくとって演奏した。

ピアノの蓋を半分ではなく全部開いたのは、ここではふさわしく思われる。そうすることによって、繊細できちんとした、きめ細やかなタッチで演奏するピアノ奏者が、ヴァイオリン奏者と同格の共演者として並ぶ。もう一度、言葉のない歌。アダージオから円熟した真剣な音で始まり、フィナーレでは、まず切なく突き進み、その後、雰囲気は晴らされ、緊張は解けていく。

繊細でしっかりしたタッチ

このようにしてプログラムの構想は明確に現実のものとなる。言葉はない。もちろん無言ではない。ツォルニツァ・バハロヴァと安積京子は適した形を、ふさわしい表現を求めていく。楽器も独自の雄弁術をもつ。音楽芸術家は楽器の「声」に歌詞は与えないけれど、イメージは創りあげられる。

ミヒヤエル・トゥムザー筆(翻訳:出射映子 ドイツ公認翻訳者)

安積京子先生のオフィシャルウェブサイト

<http://www.kyoko-asaka.com>

## Lieder – wortlos, doch beredt

Hof – Den ganzen Sonntag über schien herrlich die Sonne. Soll man da den Kammermusikabend mit einem „Regenlied“ beginnen? So hatten es Sornitzta Baharova und Kyoko Asaka zunächst geplant. Darin entschieden sie sich im Hörer Haus der Musik doch zunächst für Musik aus klimatisch geeigneten Gefilden, aus Italien. Juni „Jezzi“ (Stücke für Violine und Klavier von Ottorino Respighi standen am Beginn.

### Exotische Mischung

Auch aus Bulgarien, wo die 32-jährige Geigerin zur Welt kam, hat sie ein Werk im Repertoire, das zum Thema des Programms passt. „Lieder“ ohne Worte kombinieren sie und ihre Partnerin am Flügel reizvoll – und ein Lied, „Pesen“, findet sich auch in der „Bulgarischen Suite“ opus 21 von Pancho Vladigerov. Als „exotische Mischung“ aus Debussy und Glazunov rückt Sornitzta Baharova die Tonsprache, die sie sehr konzentriert, sehr kontrolliert ausformuliert. Auch bei Kammermusikant verlegt Sornitzta Baharova die – zunächst in Mainz, jetzt in Nürnberg hoch positionierte – Orchestermusik nicht. Allzu akzentuierte solistische Fähigkeiten nimmt sie sich nicht heraus.

„Wortlos, gleichwohl ein „Lied“. Tatsächlich lautlos, glattvoll, halb wie im Rausch halb anknirschend intoniert es die Geigerin. Und auch ihre exquisite japanische Gefühlswelt wird während des Abends dem überaus schattigen, indes stark betrudelten Publikum nachdrücklich mitgeteilt. Bei den übrigen Beiträgen aber vermeidet sie, vielleicht ein wenig übersichtlich, allzu bestimmte Außenwirkungen. Liebe ergründet sie dem Text vorzuziehen die künstlerischen Ge-

zichte. Während Respighis fünfteiliger, elegant unterhaltender Suite nehmen die Künstlerinnen Gesangsformen wie die Romance oder das Madrigal meist leidenschaftlich, auch impulsiv beim Wort. Ein Merkwürdiges („Auldame“) nutzen sie zum unmissverständlichen Weckruf nach der Devise „Keiner schlafe!“ Und ein Wiegenlied („Berceuse“) bekennt sich bei ihnen durch gewisse Monotonie zur Absicht, den Hörer beglückend aus Angenehmste einzulullen.

Zwar zeigt sie bei Pablo de Sarasate deklamatorisch an den Schluss gestellten „Zigeunerweisen“ den Mut zu



Sornitzta Baharova (vorne) mit der Pianistin Kyoko Asaka. Foto: Michael Thumser

blutvoller Extrovertiertheit: Mit der linken Hand fingerfick, mit der rechten den Bogen wie eine Klinge führend, entfaltet sie stüffige, schluchzende, schäumend aufbrausende Wallungen aus der Gefühlswelt der Operette; dabei zeigt sich imponierend, dass sie alle Tricks artistischer Saitenspielerlei beherrscht.

Bei den übrigen Beiträgen aber vermeidet sie, vielleicht ein wenig übersichtlich, allzu bestimmte Außenwirkungen. Liebe ergründet sie dem Text vorzuziehen die künstlerischen Ge-

wichte. Während Respighis fünfteiliger, elegant unterhaltender Suite nehmen die Künstlerinnen Gesangsformen wie die Romance oder das Madrigal meist leidenschaftlich, auch impulsiv beim Wort. Ein Merkwürdiges („Auldame“) nutzen sie zum unmissverständlichen Weckruf nach der Devise „Keiner schlafe!“ Und ein Wiegenlied („Berceuse“) bekennt sich bei ihnen durch gewisse Monotonie zur Absicht, den Hörer beglückend aus Angenehmste einzulullen.

Das sachliche Lyrik und vernünftige Empfindsamkeit des norddeutsch gestielten Johannes Brahms' steht dem Naturdel der Geigerin vielleicht besonders nah. Seine „Regenlied-Sonate“ opus 78 halten die Interpretinnen zwischen Empfindsamkeit und sprödem „Männlichkeit“ in der richtigen Balance.

Die sachliche Lyrik und vernünftige Empfindsamkeit des norddeutsch gestielten Johannes Brahms' steht dem Naturdel der Geigerin vielleicht besonders nah. Seine „Regenlied-Sonate“ opus 78 halten die Interpretinnen zwischen Empfindsamkeit und sprödem „Männlichkeit“ in der richtigen Balance.

Das sachliche Lyrik und vernünftige Empfindsamkeit des norddeutsch gestielten Johannes Brahms' steht dem Naturdel der Geigerin vielleicht besonders nah. Seine „Regenlied-Sonate“ opus 78 halten die Interpretinnen zwischen Empfindsamkeit und sprödem „Männlichkeit“ in der richtigen Balance.

Das sachliche Lyrik und vernünftige Empfindsamkeit des norddeutsch gestielten Johannes Brahms' steht dem Naturdel der Geigerin vielleicht besonders nah. Seine „Regenlied-Sonate“ opus 78 halten die Interpretinnen zwischen Empfindsamkeit und sprödem „Männlichkeit“ in der richtigen Balance.

Das sachliche Lyrik und vernünftige Empfindsamkeit des norddeutsch gestielten Johannes Brahms' steht dem Naturdel der Geigerin vielleicht besonders nah. Seine „Regenlied-Sonate“ opus 78 halten die Interpretinnen zwischen Empfindsamkeit und sprödem „Männlichkeit“ in der richtigen Balance.

Das sachliche Lyrik und vernünftige Empfindsamkeit des norddeutsch gestielten Johannes Brahms' steht dem Naturdel der Geigerin vielleicht besonders nah. Seine „Regenlied-Sonate“ opus 78 halten die Interpretinnen zwischen Empfindsamkeit und sprödem „Männlichkeit“ in der richtigen Balance.

フランケンポスト新聞

# 職場だより



## 表現すること 楽しむこと



教育学部附属特別  
支援学校教諭  
宮城 由紀  
(平九卒)

今回手渡された寄稿者推薦依頼には、「若い会員」とあったのだが、私は数年前に十年研も終え、決して若いとはいえない年齢である。そんな私が今回寄稿させていただいていいものかという申し訳なさもあったが、本校の中では若手になるという自信をもって、これまでこのことを振り返りながら書かせていただけたらと思う。今年度の異動で附属特別支援学校に赴任してきたが、以前はみなら特別支援学校や今治特別支援学校において勤務し、学校は変われど、ずっと知的障害児と関わって過ごしてきた。常に思い悩むことはあり、立ち止まってしまいうようなこともあったが、その度に子どもたちの笑顔や成長する姿、保護者からの温かい言葉、先生方からの励ましによって勇気もらい、少しずつ

自信をつけてやってこられたように思う。そんな中で、普段の授業のことや子どもたちのことを少し深く考え、特に思い入れのあった単元のことについて振り返ってみたい。

これまで関わってきた子どもたちは、人に対する興味を持っている児童が多く、友達の様子をそばで見たり遊びに加わっていったり、教師とのやり取り遊びを要求したりして、自分から人に関わっていくことがよく見られた。しかし、物に対する関わりは限定されていることが多く、遊びや制作の場面においては、自由な発想で意欲的に造形活動に取り組み児童がいる一方、素材や道具の扱いに不慣れで積極的に活動しづらい児童もいた。そこで、教師の支援の仕方や環境を整えることなど、児童が活動しやすい学習場面を設定することで、主体的に造形活動に取り組めるよう考えた。また、作品掲示の工夫を行うことで、友達や教師、家族の人に見てもらえるという期待感を膨らませ、作品を作る意欲を高めたり、友達の作品の良さに気付かせたりするなどし

て、自分の生活をより楽しく豊かにしてほしいと考えた。

単元「秋を見つけよう」では、自分たちが見つけてきた自然の素材に十分触れることから始めると、色や大きさ、形、硬さを言葉で表現したり、転がしたり並べたりして楽しむ様子が見られ、身近な物として捉えることができていた。そこで、みんなで協力してプリントゲームを作り、教室に設置して自由に遊べるようにした。一人で思い付いて遊んだり、その様子をじっと眺めたり、一緒に遊びに加わったり、いろいろな楽しみ方や関わり方が見られた。またその中で、どんぐりや松ぼっくりに更に関心を持つようになっていったので、遊ぶだけで終わらせず、素材として活用し壁掛けの制作を行った。自分たちが遊んで楽しんで物が素材であることで、安心感



を持つて自己表現ができ、また制作活動自体を楽しむこともできていた。活動が楽しめるからこそ主体的に取り組め、また次もやってみようと思えるのではないかと感じた。また、教室内にいつでも使えるようどんぐりやペットボトル、ラップの芯、ペンなどを置いていたところ、休み時間に自分から制作を始めた児童がいた。常に身近な場所に造形遊びができるような様々な素材や道具を置いておくことの大切さを感じた。

具体的にこれまで私自身が行ってきた活動を振り返ってみると、何を作るかは教師が決めて、飾り方や色、ある程度の素材を児童が選択するというものが多かった。素材のみを準備して、自由な発想でゼロから作り上げることには、活動の見通しを持ちにくく難しいと感じていた。しかし、子どもの言葉を拾ってイメージを膨らませ、創造的に表現する態度を育てていくことの大切さを改めて感じた。その際、児童が自分の思いを具体的に表現できたという満足感を持ち、もっと作りたいという欲求を深められるような支援を行っていきたいと感じている。また、やりたくてたまらないと思えるような動機付けや、材料や環境などから楽しい発想を広げられるような題材を幅広く考えていきたい

い。そして、児童が自分に適した表現方法などを選ぶことができるように、一人一人の実態把握を適切に行い、十分な環境を整えるよう努めていきたい。

☎ 790-0855 松山市持田町一丁目 五二二二

### 表紙作品について

#### 「襷」

作者

奥定 一孝

画題は「襷」(F四〇)。二〇一二年の個展に出した作品です。これまで、瀬戸内独特の緩やかに打ち寄せる波打ち際をイメージした作品を描いてきましたが、この歳になってやっと、私の身体性をも含めて、ここが私のトポスとなっていることに気づかされています。



# 心ある教師を 目指して



四国中央市  
金生第一小教諭  
**高田 友美**  
(平二六卒)

幼いころからずっと憧れていた教師という仕事ですが、採用され、いざ四国中央市への赴任が決まると、不安でいっぱいでした。生まれて初めての一人暮らし、慣れない土地での生活、いろいろなことを経験し、あっという間に一年が経ちました。

しかし、大学生の頃の生活と教師としての今の生活を比べては、大変だなあと思うことは数知れず、実際に子どもたちを前にすると思い通りにいかないこともたくさんありました。教室で男の子同士が取組み合いのけんかを始めたときには、どう対応すればよいか分からず右往左往したり、子どもたちを落ち着かせて授業を進めることができず、悩んだりしたこともありました。慣れない大声を出し続けて、声が出なくなってしまうことも、今では懐かしい思い出です。語り始めたら止まらないくらいいろいろなことを経験したこの一年ですが、無事に三月の修了式を迎えました。



最後の学級活動で、子どもたちと話をしていたときのことです。一人の男の子が「先生、一学期は優しくかった……。」と笑いながらつぶやきました。私は一瞬ドキッとして、「今も優しいやろっ」と返しました。後から職員室で他の先生から、「この一年間で本当に成長したね、先生らしくなったよ。」と言っていたいただき、いや

いや……一学期は優しくかったというより何も分かっていなかったただけだなと思うとなんだかおかしくなりました。

当初は戸惑うことばかりで、隣のクラスと比べては、(こんな授業でごめんね、きちんと説明できていなくてごめんね。)と子どもたちに申し訳なくなることも多々ありました。こんな頼りない私でも、「母さんが、来年も友美先生が担任がいいって言いよった!」「私はずっと友美先生のクラスがいい。」と言ってくれる子がいます。私の思いは少しでも子どもたちに届いていたのかなと思うと、うれしくてたまらず、教師という



仕事の素晴らしいとやりがいを感じて実感することができました。

そして、早くも二年目の四月を迎え、今年度は一年生の担任となりました。素直でかわいい一年生の子もたちと、新たな気持ちで頑張っています。昨年度担任した子どもたちが、三年生のお兄さん、お姉さんになって一年生の教室へ顔を見せに来てくれたり、廊下で「友美先生!」と声を掛けてくれたりすることも、私の大きな励みになっていきます。

不安でいっぱいの中スタートをきった一年目でしたが、教員生活の始まりをこの金生第一小学校で過ごすことができて本当によかった!と思える出会いに恵まれ、人と人の繋がりの素晴らしさを実感する毎日です。私が落ち込んだり、悩んだりしたときも、力強く励ましてくださる先輩の先生方、週末に松山の実家に帰ると疲れを癒してくれる家族、近況報告をして笑い合える同期や友人に支えられたこの一年でした。周囲の人々の支えがあつてこそ、充実した一年間を過ごすことができたのだとつくづく感じ、感謝の気持ちが込み上げてきます。

大学時代に学んだ多くのことと、忘れられない一年目の経験を糧に、もともととパワーアップし、心ある教師に成長していきたいと思います。

☎ 799-0111 四国中央市金生町  
下分一六六五



## 新たな土地で



松山市  
立岩小教諭  
吉川 紗希  
(平二四卒)

愛媛大学を卒業して三年が経ち、学級担任として子どもたちの前に立つのも、四年目を迎えた。

特に、大学を卒業して最初の一年間は、何をするのも初めてで、毎日がただ慌ただしく過ぎていくばかりだった。日々の授業に追われ、レポートに追われ、校務に追われ……。立ち止まる余裕はなく、目の前のことに必死だった。もちろん楽しいこともあったが、苦労も多かった。そんな中でも、私が最初の三年間を過ごすことができたのは、今まで出会った多くの人々に教え、導かれ、助けられたからである。

家族にはたくさん心配もかけ、支えてもらった。毎日遅くまで仕事をして家に帰っても、温かく迎えられた。学校のこと、私生活のことなど、たくさん話をした。

そして、大学時代からの友人の存在は大きかった。共に教員を目指すし、教員となった仲間たち。初任者研修のことを話したり、学

級づくりや宿題の方法を相談したり、本当に多くのことを語り合った。そのたびに刺激をもらい、辛いことも乗り越えることができた。

そして、職場の先生方には、本当にたくさんのお面で助けていただいた。ちょっとしたことで、授業中に教室をのぞいても、優しく教えていただいた。職員室では、近くの席の先生が何でも相談に乗ってくれた。学年部の先生方は、いつでも一歩前を歩いてくれ、優しく、楽しく仕事を教えてくださった。また、子どものかわいい言動を伝えあつては笑い合い、困ったときにはすぐにフォローしてもらい、いつも一番近くで見守っていただいていた。周りの先生方の支えのおかげで、苦しいこと、嫌なことがあつても毎日楽しく仕事をすることができた。

そして、忘れてはいけないのが子どもたちだ。子どもを教育するのが教員であるが、子どもの助けなしでは毎日過ごすことができなかった。特に、学校のこと、子どもの方が詳しい。困っていると、子どもたちが何でも教えてくれた。悩まれたり、本気で怒ったりすることはあつても、やっぱり子どもたちに助けられる。朝、体がしんどくても、子どもたちに会うと、自然と笑顔になる。「今日

も頑張ろう」と思える。子どもの成長や微笑ましい姿を見るたびに「教員になってよかった」と実感する。子どものパワーが、一番の活力となっていた。

このように周りのたくさんの人たちに支えられ、私は毎日を過ごすことができた。辛いこと・苦しいことも、周りの支えによって乗り越えられたと思う。

そして、そんなバタバタの初任の三年間を終え、四年目の春、転機が訪れた。初任者として赴任した学校を離れることになったのだ。初めての学校で学んだことはあまりにも多く、まだまだ残って学び続けたい気持ちは大きかった。しかし、この異動が自分の成長につながると信じて、新しい学校に赴任した。

今、勤めている立岩小学校は全校児童が二十五人の小さな学校だ。そして、私は五年生三人の学級担任をしている。以前の三十人学級と比べると、人数も少なく毎日が驚きの連続だ。

人数が少ないと、たくさんのお話を全校で行う。毎日、給食は全校で食べる。毎週昼休みには、全校遊びがある。朝読書や朝の歌練習も全校で行う。誰かが声を掛けると、すぐに全校が集まる。それは、仲がいい証拠でもある。教員も子どもたちも、学校にいる全員

が全員の名前を分かっている。学校が、一つの家族のように見えなくてくる。

最初は今までの学校との違いに戸惑うこともあったが、立岩小学校は温かく私を迎えてくれた。子どもたちは、笑顔で話しかけてくれるし、職員室では、誰もがすぐに相談に乗ってくれる。

また、学級は、女子四人で毎日楽しく学校生活を送っている。人数が少ない分、勉強も丁寧に見ることができ、個別指導も力を入れて行うことができる。理科では、何度も外へ観察に出たり、実験を何十回も繰り返したりしている。人数が少ないからこそできることがたくさんあり、それを生かした指導を今後も続けたい。

教員生活が始まって、三年余りが過ぎた。日々の生活に追われ、自分のことで手一杯の毎日を送っている。今の自分は、大学生活に夢見ていた自分と比べて、どうだろうと考えた。

学生時代は、学習支援として三年間、公立学校で学ばせていただいた。たくさんのお話を子どもたちの学校生活の様子を見せていただいた。多くのことを学ぶ中で、「自分もこんなことがしたい。」「クラスには、こんなものを置きたい。」「授業はこんな風に進めたい。」「楽しいことをいっぱいした



791-8013 松山市山越六丁目

一四一七

いよね。」と、毎日のように大学の仲間と語り合った。しかし、あの頃仲間と語り合った多くの夢は、まだ実現していない。日々の忙しさに理由をつけて、大事なことを忘れていってしまう。

今年度は異動もあり、今までの自分を変えるチャンスでもある。このチャンスを逃すことなく、これからは、今まで学んできたことを生かしながら、新しいことにたくさん挑戦したいと思う。そして、今まで支えてもらい、これからも助けてもらおうだろう、家族・友人・周りの先生・子どもたちに感謝の気持ちを忘れず、自分の理想の先生に少しでも近づけるよう、これからも精進したい。

勝負の年



東温市 西谷小教諭 渡部 好紀 (平二五卒)

私が勤務する東温市立西谷小学校は全校児童が五十九名の小規模校です。周りを山々に囲まれ、自然豊かな環境の中で生活しています。休み時間や放課後になると、学年・男女関係なく、みんな仲良く遊びます。また、田植えや稲刈りなどに取り組む「自然体験教室」、全校で緑化運動を行う「緑の少年隊活動」など、自然体験活動も盛んに行われています。このように小規模校ならではの素晴らしい体験ができる学校で、昨年度は、初めての小学校で体育主任、そして四年生学級担任。全体の流れがつかめていないまま四月初の職員会議でいきなり運動会の計画書の審議。そして五月末には運動会。ピストルの打ち方も、旗の挙げ方も全くの素人だったので、

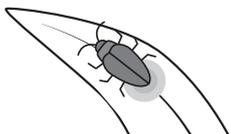
周りの先生方に教えていただきながらのスタートでした。運動会が終わったと思えば直後に公開授業が待っていました。二学期になると、陸上練習に始まり、市音楽会、そして学習発表会……。途中子どもたちもバテながら、自分自身もよく分かっていないまま一年がスタートし、助けていただきながら無理やり一年が通り過ぎていった昨年度でした。そして今年度は六年学級担任、そして昨年度から引き続きの体育主任。夢のような立場であると同時に、「果たして自分に務まるのだろうか?」と、とても不安に感じました。この間、とにかく忙しい毎日。子どもたちも慣れていないのか、「大丈夫か」、生きてるか?」と言いたくなるくらい反応がまだまだ今ひとつ。授業もままならない中、新学期が始まって二週間後には早速隣の東谷小学校と合同の修学旅行がありました。行き先は、私が小学生だった頃とほぼ同じでした。一日目は広島・山口、そして二日目は福岡・

スペースワールド。行く前は「楽しめるかな」と思っていました。そんな余裕は私にはありませんでした。CDラジカセの調子が悪く曲が止まる、宿泊先では修学旅行だからこそよくあるハプニングも。そして、みんなが楽しみにしていたスペースワールドでは、グループからはぐれてしまった児童もいて、大慌て。いろいろありましたが、子どもたちに驚かされたことが二つあります。一つ目は二日目の朝のこと。六時三十分起床となっていたはずなのに、六時頃廊下に出てみるとガヤガヤ声。三十分までは静かにせないかんと言ったやろが」と思いながら子どもたちの部屋へ入ってみると、みんな布団を片づけ、部屋を出る準備をしていて、前日に比べて迅速な行動ができていました。二つ目は帰りのバスの中のこと。西谷の児童も、東谷の児童もクイズで大盛り上がり。「こういうクイズでめっちゃ盛り上がるし、真剣に考えるんだなあ。」と改めて子どもの素直さ・純粋さを思い知らされました。一日目に

比べて東西の輪が深まり、子どもたちはみんな修学旅行が「楽しかった。」と言っていたので、良い思い出ができて良かったと思っています。また、集団で行動するときの規律を守る大切さを痛感した児童もいたでしょう。少し成長して帰ってくるのができました。しかし、修学旅行が終わったから一安心とはいきません。修学旅行が終わって一ヶ月後には運動会が待っています。そして運動会が終わると、すぐ水泳学習・放課後水泳練習が始まり、その先に水泳記録会があります。六年生にとっては怒涛のように次から次へと学校の先頭に立たなければいけない行事が押し寄せてくる忙しい一学期です。四月最初にみんなに書いてもらった一年間の決意には、「最高学年として」や「六年生としての自覚」といった言葉が並んでいました。彼らの決意と私の願いは同じです。六年生としての自覚を持ち、最高学年として恥ずかしくないような立派な姿で西谷小学校を引っ張ってほしいです。そのた

めにも、私自身が心を引き締めて子どもたちと活動していかなければいけません。まずは、目の前にある運動会。子どもたちが主体となつて運動会を運営できるよう指導していきたいです。

東温市則之内 乙八三五



# 感謝の心と 笑顔を大切に



西条市  
西条南中教諭  
中川 典子  
(平二二卒)

私にとって教員という職業は、  
たくさんのお会いを与えてくれる  
魅力的なものです。講師経験を含  
めると、現在勤務している学校で  
四校目となります。たくさん先の  
生と子どもたちとの出会いがあり  
ました。そんな中、私は「いつも  
楽しそう」とか「いつも幸せそ  
う」と声を掛けられることがあり  
ます。しんどい時もあるのですが、  
周囲からこのように言われると何  
だか嬉しく、幸せな気分になりま  
す。幼少期から今日までのたくさ  
んの方との出会いが、今の私をつ  
くってくれているのだと心から感  
謝しています。

ちゃんクラス」に決まりました。  
みんな理想のクラスを発表し合  
い、考えて決まった学級目標です。  
学級開きの時に、私は子どもたち  
に次の三つのことを伝えました。  
一つ目は「何事も全力で取り組  
むこと」です。学習、行事、委  
員、係りの仕事など、最高学年と  
して後輩のお手本になろう。そし  
て、自分が後悔しないために何事  
もみんなで全力を出し合って取り  
組み、最高の思い出を作っていこ  
う！と約束しました。

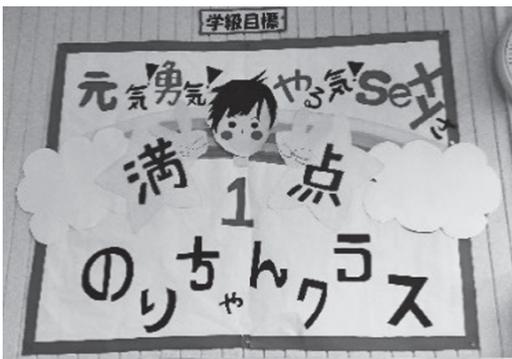
二つ目は「友達を認め合うこと」  
です。人には得意なこともあれば  
苦手なこともあります。クラスの  
仲間でお互いを認め合い、助け合  
うことのできるクラスを作ろうと  
いうことです。  
三つ目は「当たり前前」が当  
たり前にできる人間になろう」で  
す。西条南中学校には当たり前前  
のことが当たり前前である「普段着  
日本一」というスローガンがあり  
ます。これをクラスでも目標に掲  
げました。気持ちの良い挨拶がで  
きる、正しい服装で生活できる、  
友達が嫌がることをしない、自分

の役割に責任を持ちやり遂げる、  
清掃を一生懸命行うなど、ごく普  
通のことですがこれらを徹底して  
いこうということでした。  
そして、これらを達成するため  
に私自身も目標を立てました。ま  
ず、日常生活を通して一人一人の  
生徒理解を図ることです。小さな  
変化を見逃さず、成長したところ  
や頑張っていることを積極的にほ  
めるようにしています。また、少  
しずつルーズになっていく生活を  
その都度声を掛け、気づかせるよ  
う意識しています。そしてもう一  
つ、新学期から毎日続けているこ  
とが教室環境を整えることです。  
一日の終わりには、必ず教室の状  
態を確認するようにしています。  
乱れている机と椅子を整頓し、落  
書きがされているものは全て消  
し、置き勉のチェックをすると  
いった感じです。

高校時代、恩師に言われた言葉  
に「環境は人を変える」という言  
葉があります。教室環境を整える  
ことで学習にも集中して取り組む  
ことができ、人間関係もよりよく  
築いていけるようになることを  
信じ、毎日欠かさず続けていま  
す。机の落書きには生徒の気持ち  
が表れていることもあります。以  
前、友達に対するからかいの言葉  
が書かれていることがあり、次の  
日にクラスに対して話をするこ  
もありました。何気なく書いた言  
葉だったかもしれませんが、これ  
で傷つく人がいること、みんなに  
とって居心地の良いクラスを作っ  
ていこうと話をしました。最近で  
は、意識して机を整頓してくれる  
生徒が見られ、落書きもなくなり  
つつあるなどの変化が表れていま  
す。  
昨年度、一年間の初任者研修を  
通して、私が生徒と接する時に意  
識していることは「生徒は教師の  
鏡」ということです。生徒の言動  
には私の関わり方が大きく影響を  
与えていることを忘れず関わって  
いきたいです。今の私の目標は、  
子どもたちを周囲の方への感謝の  
気持ちを持って、最高の笑顔で卒  
業させることです。そのために、  
「生徒は教師の鏡」という言葉を  
心に留めて、日頃から生徒にも感  
謝の言葉を伝えること、笑顔で生  
活することを心掛けていきたいと  
思います。  
たくさんの方々に支えていただ  
き今の自分があることに感謝し、  
これからも全力で目の前の子ども  
たちと関わっていききたいと思いま  
す。

☎ 799-1364  
西条市石田

六六四一



# 年を取れる幸せ



喜多郡  
内子中教諭  
**川野 博章**  
(平一二卒)

「もしももう一度だけ若さを  
くれると言われても

おそらく私はそつと断るだろう

若き日のときめきや迷いをもう

一度繰り返すなんて

それはもう望むものではない。」

さだまさしさんの『人生の贈り物』の歌詩(さださんは、歌詞の詩情を重視し、常に歌詩と表記している)ので、誤字では無い)の一節である。

若さこそが素晴らしく、年を取ったらダメだという風潮の昨今であるが、私は年を取ることには若いことと同じくらい素晴らしいことだと思ふようになった。

平成二十七年三月、お世話になった愛媛大学教育学部の教授が定年退官されるということで、大

先輩方が発起人となって祝賀会が行われた。会に先立って、発起人の先輩が、他界された先生のために、黙祷をささげ、「彼は、ともに愛媛大学で技術教育を学んだ同志であった。教授も、当時は若手で、先進的な方であったが、最近病を得られていたと聞く。元気で、定年まで勤め上げることはそれだけで尊いことだ。」と語られた。私は、やはり今年急逝した同級生のことを思い出していた。教科は違えど、ともに大学時代を過ごした仲間である。昨年、ある研修会で久しぶりに言葉を交わした矢先のことで、しかも、詳しいことが何も分からなかったために、ひとさき驚きと衝撃を味わった。人の命は季節の花のように儚い。千年に一度の自然災害が無くても、事件や事故、心身の病気は容赦なく襲ってくるものだ。それを乗り越えて、年を重ねることとはそれだけで尊いことだと思わずにはいられない。一方で、儚いからこそ、美しさも増す。私の倍、生きておられる方は、それだけの経験も積み重ねておられるという

ことも考えなければならぬ。私は、記念写真では中段に立つほどの年になっているのだが、学生諸君や若い先生方と話している、年を取りたくないとか、あの頃に戻りたいとか、そんな気持ちは不思議と湧いてこなかった。彼らは、私がやつとの思いで乗り越えてきた苦労や失敗をこれから味わわなければならないのだ。講師の忙しさの中無理矢理時間を作って行った教員採用試験の勉強も、若いというだけで慕ってくれた生徒たちに、満足な指導ができなかった悔しさも、授業が思うようにいかず悩み抜いた日々も、仕事と家庭のバランスを欠いてしまった後悔も、自分の焦りが行き過ぎた指導を呼んだ苦い記憶も、今から繰り返すのは御免被りたい。私は、これまでの経験が育ててくれた今の自分が気に入っているし、来年も新しいことにチャレンジして、よりよい自分になりたいと考えている。今後も、偉大な先人たちの言葉に耳を傾け、自分を磨きつつ、若い世代に技と心構えを伝達していきたい。

最後に、西予市立溪筋小学校教頭井上哲男先生と、松山市立高浜中学校教諭大内顕之介先生の御冥福をお祈りします。

☎ 795-0303  
喜多郡内子町平岡  
甲三四八



稲井先生退官記念祝賀会 平成27年3月14日

## 会報の送料納付

### について

平成二十六年七月号でもお知らせしましたように、会報の個人宛発送は、送料を各自で負担していただくことになっております。

出費多端の折柄恐縮ですが、未納の方は、左記要領で納付方お願い申し上げます。

### 記

① 一年間五〇〇円で、二年間分ずつ収めるようになっていきます。

② 二年ごとの更新は、煩さなので、何年間かを、まとめられる方もあります。

納付期限 毎年三月三十日までとし、二年毎に更新する。

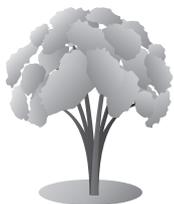
送金方法 郵便為替・現金書留・郵便振替で

振替口座番号

〇一六四〇一七二七五四  
送り先 ☎七九〇一八五七七  
松山市文京町三

愛媛大学教育学部同窓会

領収書は、振替用紙をもって、かえさせていただきます。



# 音楽と共に



愛南町 城辺中教諭  
北條 志保  
(昭六三卒)

歌うこともピアノを弾くことも苦手な私が音楽科の教員になってからもう三十年近くになる。今、私は、残りの教員生活の中で、出会うであろう音楽とそれを奏でる生徒たちに限りある尊い時間と出会いの「奇跡」を感じている。

これほど技能の不十分な技能教科の教員は、他にいないであろう。教員になってはみたものの私はすぐにやめようと思っていた。毎日毎日「指導力不足」という烙印を自分自身に押しつけてきたように思う。しかし、「石の上にも十年？」私にとつての大きな転機が訪れた。その年、私は、「今年度末で退職します。」と校長先生に伝えていた。校長先生は、「もう少し考えてみなさい。」とだけ言われた。そのような中、音楽発表会を終え、子どもたちにアンサンブルコンテストのための楽譜を渡した。コンテストまでは二週間。子どもたちは、朝も昼休みのわずかな時間までもとにかく無我夢中で曲をさらった。音楽をする

ことが楽しくて仕方ないというところがどの子からも伝わってくるようなそんな学年だった。結果、サクソフォン四重奏が県大会に出場した。そのメンバーは、コンテストで打楽器アンサンブルを初めて目にし、来年は「打楽器アンサンブルをします。」と言いつつ、翌年、打楽器で県大会に出場しようというメンバーだった。音楽が好きで好きでたまらない子どもたち、感性豊かで高い技能を身に付けている子どもたち、そんな子どもたちが作り出す音楽は、魂の入った心震える音楽となった。私は、この子どもたちに真の音楽の世界へと連れて行ってもらったように思う。

そして、この子どもたちともう一年音楽をしたいと心底思うようになっていた。この年にこの子どもたちとの出会いがなければ、今、私は何をしているだろうか。

その後、私は、心に沁み入る音楽づくりに没頭した。コンクールなどは関係ない。とにかく魂の入った心震える音楽づくりに夢中になったのだ。そして、これを実現していくために必要なものを、三年前に出会った子どもたちから教わった。音楽を支えるものは、音楽以外のものであるということ

を……。

一 挨拶  
あの子どもたちの挨拶は格別だった。明るい表情、はりのある声、校内のみならず地域でも気持

ちのよい挨拶が響いた。そんな挨拶に包まれ、私は毎日幸福感に満ちていた。

二 返事  
返事の中に不器用さを吹き飛ばす意欲と素直な心が詰まっていた。私の意欲もこの返事に支えられていたように思う。

三 環境美化  
よく気づく子どもたちであった。生徒玄関が汚れていたら掃き、休日には、草引きをするための時間を各自が決めて登校してやるのだ。

四 朝マラソン  
夏場でも倒れないような体力づくりのために行っているものだが、あの子どもたちからは文句や弱音は聞いたことがない。とても真摯に取り組んだのだ。

五 温かい人間関係  
そして、全てのベースとなるものは、温かい人間関係であった。入部して、初めの一年間は、休む生徒も多かったが、自分たちで声を掛け合い、笑顔あふれる心地よい場所になっていたのである。一人一人が出会った仲間に感謝の気持ちをもっていた。

このような子どもたちは、私を四国大会へと連れて行ってくれた。四国大会があることすら知らなかった子どもたち。出場が決まって、「一、二年生にがんばってね。」と声をかけた生徒もいたくらいである。思ってもいなかった

たこの結果は、子どもたちに満面の笑顔と自信と誇りをもたらした。県代表にふさわしい挨拶や返事へとさらに高まっていたことは言うまでもない。コンクールは目的にはならないが、目標とするには悪くないのかもしれないと少しだけ思った。私にとつて、毎日が感動の連続であったが、この学年が引退した後、さらに大きな感動が待っていた。

次の学年は、演奏が成立しないであろうと私が最も危惧した学年であった。とにかく指が回らないのである。短く簡単な曲でもまともに演奏できない生徒が数名いた。このメンバーで一曲演奏することはできるのだろうか。一年かけて、せめて一曲演奏できるようにしたいと考えていた。しかし、上の学年が引退した後、私の予想

を気持ちよく裏切り、目を見張るほどの成長を見せてくれた。苦手であるがゆえに、人よりつらい練習を重ねてきた子どもたちは、音色を豊かに感じ取ることができるようになっていたのだ。中でも、このメンバーが、卒業生に向けて演奏した「ありがとう」は、感謝の思いがあふれた魂の震えるような音色だった。人数が少なく、木管アンサンブルではあったが、このメンバーで、さらに音楽を追求したいと思った。その年の異動で、その願いは叶わなかったが……。

本町には、小規模校しかなく、吹奏楽ができるという環境に巡り合わせることが貴重なことである。現任校においても、この夏には、部活動成立が難しい状況となってくる。そんな中、これまで出会わせていただいた音楽と生徒に感謝の気持ちでいっぱいである。

部活動について述べてきたが、授業や行事の合唱活動においても然りである。目の前の子どもたちと共に学び、共に感動し、音楽の世界を楽しみたいと思う。これから出会うであろう音楽とそれを奏でる生徒たちとの出会いの「奇跡」に感謝して……。

(☎) 798-4131 南宇和郡愛南町城辺  
甲九〇八一八



を気持ちよく裏切り、目を見張るほどの成長を見せてくれた。苦手であるがゆえに、人よりつらい練習を重ねてきた子どもたちは、音色を豊かに感じ取ることができるようになっていたのだ。中でも、このメンバーが、卒業生に向けて演奏した「ありがとう」は、感謝の思いがあふれた魂の震えるような音色だった。人数が少なく、木管アンサンブルではあったが、このメンバーで、さらに音楽を追求したいと思った。その年の異動で、その願いは叶わなかったが……。

本町には、小規模校しかなく、吹奏楽ができるという環境に巡り合わせることが貴重なことである。現任校においても、この夏には、部活動成立が難しい状況となってくる。そんな中、これまで出会わせていただいた音楽と生徒に感謝の気持ちでいっぱいである。

部活動について述べてきたが、授業や行事の合唱活動においても然りである。目の前の子どもたちと共に学び、共に感動し、音楽の世界を楽しみたいと思う。これから出会うであろう音楽とそれを奏でる生徒たちとの出会いの「奇跡」に感謝して……。

(☎) 798-4131 南宇和郡愛南町城辺  
甲九〇八一八

# 言葉のチカラ

春風接人、秋霜自肅



西予市 野村高教諭  
坪倉 寿徳 (平二四卒)

平成二十七年三月、三年間務めた川之石高校からの転勤を命じられました。川之石高校は初任校といふこともあり、そこで出会った生徒、先生方、保護者の方、そして地域の方との縁は、私の一生の宝物となりました。

県立学校では二人目の男性家庭科教員としての毎日は、試行錯誤の連続でした。特に調理実習は大変でした。実習が始まるとあちこちから「野菜の切り方がわかりません!」「コンロの点け方がわかりません!」「痛いっ!」などの声が聞こえ、こちらが予想もしていないハプニングがたくさん起きました。調理実習が終わると倒れこみたいくらいの疲労感が襲ってきます。一方生徒はというと、いきいきとした表情で試食や片付け

をしており、授業後の感想では、「はじめてお米を炊きました。次は家でおにぎりに挑戦したいと思えます!」や「調理実習は今まで出来なかったことが出来るようになるし、何より楽しいです!」といった、先ほどまでの疲労感を吹き飛ばしてくれるようなことを書いてくれる生徒もいました。

そんな初任校での三年間は決して楽しいことばかりではありませんでした。自分の経験や知識、技術のなさからくる不安を抱えながらの教員生活でした。そんな後ろ向きな気持ちになった私に、あたたかく声をかけてくださった先生方がいました。先生方にかけていただいた言葉で、どれだけ励まされ、前向きな気持ちにしていたただいたことか……その言葉のいくつかを紹介させてもらいます。

「何事も一生懸命すれば、必ずその熱意は生徒に伝わる。そうすれば、もし困った時、生徒が助けられる。」

これは教員になつてはじめての授業を控え、不安で一杯だった時に、同じ部活動の顧問の先生がか

けてくださった言葉です。「失敗したらどうしよう。」「うまく伝わるかな。」そんな後ろ向きなことばかり考えていた私は、この言葉で「とにかくやるしかない。」と前向きな気持ちで授業に臨むことが出来ました。決してうまくいった授業とはいえませんでした。生徒一人一人が向けてくれた真剣なまなざしは、決して忘れることはありません。

「人として正しくあれ。」  
これは同じ学年団で担任をされていた理科の先生が座右の銘にされていた言葉です。この先生のクラスとはかく個性的。学校行事を盛り上げてくれることもあれば、私たちに心配をかけることも多々ありました。そんな生徒たちに先生は、「人としてどう在るべきか。」を常に伝えておられました。この先生と一緒に仕事をさせていただくときは、私も自然と背筋が伸びた気がします。

先日の転勤に際し、多くの方から温かい言葉をかけていただきました。特に離任式では、恥ずかしそうな様子で手紙を渡してくれた

生徒、わざわざ遠方から挨拶に来てくれた卒業生、ビデオメッセージを作ってくれた生徒など、そのすべてが私の心をあたたくしてくれるものばかりでした。「言葉のチカラ」を改めて感じる日となりました。現在、携帯電話やスマートフォン等の普及により、自分の気持ちをメールやLINE等でしか伝えられない生徒が増えて

います。私自身も高校生の時から友人との主なコミュニケーションツールは携帯電話によるメールでした。便利で気軽にやりとりが出来る一方で、思わぬトラブルに発展しかねない一面もあります。今一度、言葉の大切さを生徒に伝えていかなければ、と思います。

離任式を終え、引越しの準備をしていると、大学時代に読んだ本を見つけました。懐かしく思い手に取ると、目に入ってきた言葉がありました。それが題名にある「春風接人、秋霜自肅」です。これは佐藤一斎の言葉で、「春風のような和やかさで人に接し、秋霜の厳しさをもって自己を抑制する。」という意味だそうです。新採三年

を終え、良くも悪くも慣れが出てきた私が、新生活の始まるタイミングでこの言葉に再び出会ったのは、きっと意味があるのだと思います。「もう一度心がけなさい。」そう本が語りかけているようでした。

最後に、四月から務めることになった野村高校は、とても穏やかな学校です。私は一年生畜産科の担任をさせていただくことになりました。個性的な二十一名の生徒と、時折聞こえてくる動物たちの鳴き声に驚きながらも毎日充実した日々を送っています。この生徒たちが言葉を大切にし、周りの人が温かい気持ちになる風をおこしてくれるよう、これからもひたすらに、ひたむきに取り組んでいきます。



# 勇気を行動の友とする



菅 宏司 (平一〇卒)  
代表取締役  
かすがいジャパン(株)

ある著名な高齢者の方から言われた一言が、ずっと頭の片隅に鎮座している。「君たちは幸せだなあ、無限の選択肢を持って。私たちの時代は一度会社に入れば死ぬまで勤め上げる、一度結婚すれば死ぬまで添い遂げる。親の面倒は子がみる。今考えると見える世界も、過ごす社会も、選択肢も極端に少なかった。でも同時に、君たちは可哀想だなあ。無限の選択肢を持つているにも関わらず、選択の方法を教わらなかったのか、いつも見えない大陸を追い求めたり、隣の青い芝を羨ましがっている。」

愛媛大学を卒業して、はや二十一年に差し掛かろうとしている。あつと言う間ではあったが、同時に怒涛の年月だったように思う。「アメリカが俺を呼んでいる」と、自分をごまかし、就職活動から逃げていた頃を思うと、よくもまあここまで生きて来られたものだと、しみじみ感じる。寄稿の依頼をいただき、自分なんかで良いの

かと思う反面、不惑の四十を迎えて人生の後半戦に入った今、また新たな挑戦をしようと動き始めたタイミングでもあったこと、曲がりなりに経営者として社員を雇い、講演で話し、人材育成なども行っていることもあって、おこがましい限りではあるが、少し振り返りも含めて、思うところ書いてみようと思う。

振り返ってみると、私の人生はこれからもそうに違いないのだが、「選択」と「一歩踏み出す勇氣」、この二つのワードに集約される。言い換えれば「自立」と言えるかもしれない。この二つの繰り返して、多くのご縁をいただき、視野が広がり、今がある。現在、海外と東京、愛媛を行ったり来たりしながら、数多くの活動に従事させて頂いている。四国若者会議、かすがいプロジェクト、鴻鵠塾、コラボハウス、かすがいジャパン……、過去を遡れば、アンダーゼン、A I Gにライフネット生命など、外資系にベンチャー企業、経営者、サラリーマン、ボランティアやフリーランス、なんでもござれの経歴である。

熱しやすく冷めやすいと言われれば身も蓋もないが、自分の中で一応の整理はついているつもりだ。働くことを労働力の切り売りではなく、単に就職や就社と捉えず、提供する価値をより大きく、どうせ働くなら自分の得意で特異

な点で関わるのが社会に一番大きな価値を提供できると。音楽家が音楽を通して社会に安らぎを提供しているように、たまたま好きな事業の立ち上げなどを通じて、社会に必要とされたいと考えている。仮に、会社や組織に依存してしまうと、自分のように弱い人間は、きつと途中で潰れてしまうか、環境に依存して、社会が悪い、政治が悪い、上司が悪いと愚痴ばかりを言う生活を送っていたに違いない。



では何故、好きで得意なことをして生きていられるのか。思うに人は、日々大なり小なりの選択肢と共に生きている。コーヒーに砂糖を入れるか入れないか、会社を続けるか転職するか、先輩の誘い

を受けるか断るか、大企業にかベンチャーにするか。もし、場当たりの気分で行き先を繰り返して行けば、十年後にはどこに行き着くだろうか？神のみぞ知る、のではないだろうか。もしかしたら楽な方ばかりを選びかねない。金持ちになりたいのに大企業にいては難しいし、時間に左右されない生活をしたのにサラリーマンだと不可能だ。一方、こんな生活を送りたい、こんな自分でありたいと言った目標や目的のようなものがあれば、一時的には厳しい局面もあるが、確実にその方向には進んでいる実感と共に、選択の方法は自ずと定まってくる気がする。逆に言うと、方向性を持たない人生は、環境に依存して、常に環境に流される人生になってしまうかねない。自分の人生のハンドルは自分で握りたい。私にはこれが原動力でもあった。

ただし問題がある。一歩目が出ないのである。変化は怖いし、経験した事のない事も恐ろしい。だから、恐れを回避するために、あらゆる言い訳を自分に用意してしまう。だからこそ、面道で道局面面であればあるほど、私は自分に対して、「一歩目を踏み出す勇氣」を呪文のように唱えて来た。

好き嫌いはあるにせよ、これからの社会はより厳しさを増して行くと思う。税金は増え続け、生活コストも上がり、公助の仕組みも

改悪の方向に進まざるを得ない。そんな状況下で環境に依存した人生を送ること以上に危険なことはない。多くの選択肢を否定することは、否応なく情報にさらされる現状では難しい。そんな中、環境に左右されず、自分で自分の人生のハンドルを握るためには、一定の方向性を伴った選択と、実行する勇氣に尽きるのではないだろうか。

不惑の四十を迎えた今、新しい事業の立ち上げを行っている。人生の後半戦をかけるに相応しいチャレンジだと思ふ。全く未知の分野ではあるが故に、毎日が？と選択の連続で、脳みそに汗を書きながら、せつせこつせこ、恐る恐る一歩目を踏み出している。「勇気を行動の共にする」。私の座右の銘と共に。





# 先輩を偲ぶ

林傳次先生遺稿集

## 「把翠」を繙く(十二)

### 「巻頭言」集

#### 『愛媛教育』誌より

#### 【事実の直視】

或る会合が始まる前の控え室でのこと、

「今年の稲作はどうです。」

「申分ありません。此の調子だと水に不足もありませんし……」

すると突如として横から口を挟む人があった。

「馬鹿なことをいふ。もう一週間も前からつくつくほうしの鳴くのが聞えないのか。既に気候が秋に入った証拠だ。土用のうちからつくつくほうしが鳴くなんて途方もない変調子だ。こんな事で何で稲作がよいものか。」

それから一週間、今日の新聞は低温の為稲熱病蔓延の兆候あり、減収は免れまいと報じてゐる。

其の人が附け加へて言つた様に「土用中につくつくほうしが鳴いたら不作だ。」とは大学の講義や稲作の研究書には書いてないだろ

う。然し長い間事実を直視した人の一言は、よく事象の中核をいひ

あてる。我が教育界に教育原理や教育哲学等の研究熱の尚旺盛なる

はもとより喜ぶべき事であるがこれに比すれば、教育事実を直視し、これを丹念に蒐集記録し、更にこれを系統づけて、そこからある原理を帰納するといふ態度、即ち科学的態度ともいふべきものが欠如

してゐる憾はないだらうか。而もかゝる研究は日常教壇に立つ實際教育家にのみ可能なるを思ふ時、

かういふ研究態度のもつと盛んなる事を切望してやまない。  
(昭和三年八月号)

#### 【もつと全体的考察を】

文部省の中学校改善案が発表せられてから、之に対する賛否様々の意見が、教育雑誌は勿論の事、日々の新聞紙上に夥しく公にされたが、今は改善案其の物についての論議はやめて、最近英語科、数

学科、東洋歴史科等の教授時数減少に對し、夫々斯道の大家並びに該科担任教師の会合に於いて、反對の決議がなされた事実について考へてみる。

之等の決議は何れも該学科を重要なりと述べ、従つて之が時数は決して減少すべからずとし、さては「斯の如き無謀に近き企図に反對す」と結んである。

凡そ如何なる学科と雖も、重要ならざるものはなく、重要なればこそ中学校の学科目に入れてある

のである。従つて単に其の学科のみを切り離して考へれば幾時間あつても充分といふことは言ひ得ないかも知れない。要は該学科の、

人間知能否人間の教養に如何なる位置を占むものなるか、又は中学校の教育に於ては如何なる点まで知らしめざるべからざるかを考へ、更に他の教材との時間配当の割合を考察して、始めて時間数の適否が判定し得られるのである。

之等の反対論者が一言これに言及せざるは我田引水の論と評せられても致方があるまい。更にこれらの意見が凡て現在の教授時数を標準として、それ以下に減少すべからずと強硬に主張してゐる様であるが、かく現在に執着してゐては、

いつまでも改善される日が来ないではないか。かういつたからとて之等の学科の時数を減じて差支えないといふのではない。要は何学科の教員といふ色眼鏡をすて、全体的に一応考へてみてほしいといふのである。立場が違ひ、視角が異なつてくれば考へもいくらか分れて来る。かく始めて公平な意見が生れてくるのだから。

#### 【情熱欠乏の時代】

(昭和三年十月号)

教育会の会合に出席する毎に、何時も遺憾に思ふことが一つある。それは或る一つの新しい計画が提案された場合に、それが善いことであるか否かを考察する前に、出来得るか出来得ないかを論議する傾向の看取される事である。之は教育者の考へ方が空虚空論を避けて実行を重んずる摯実な方向に転ずる事を示すものとして喜ぶべき事であるかもしれない。然しながら教育者にして真に実行を重んずるならば善悪を第一に考察し、善い事だと決すれば、如何にして之を実行し得るかを研究考察するの順序を取るに違ひない。従つて此の順序を逆に行く傾向のある事は、則ち教育者の消極的退嬰的な一面を露すものと言はれても、致方のない事ではないか。

何が故に消極的になるか。情熱が足りないからである。だが情熱の足りないのは独り教育界ばかりではない。真に火の様な情熱を懷

いて其の業務に従つてゐる人が幾人或る。農家然り。工業家然り。商業家然り。学生然り。役人然り。現代の世相を概観して、之を情熱欠如の時代といふも過言ではあるまい。

何が故に情熱欠如せるか。明確なる理想を把持してゐないから。無理想は優柔不断其の日暮しの生活、吉田松陰の謂ふ「觀望自重」の生活を産む。

現代不安の要因は此の無理想、及びこれに伴ふ情熱の欠乏にあるのではないだらうか。次代の國民を養成する教育に於いて、常に理想を把持し、これを達成するには如何なる困苦をも笑つて之を忍ぶの態度を養成せんことを切望してやまぬ。  
(昭和五年五月号)

### 祝・叙勲

(平成二十七年四月二十九日)

#### ☆ 瑞宝双光賞

#### 教育功勞

保手浜勝彦 殿

伊予郡砥部町宮内三三五  
昭和四十四年 卒



川柳

傘寿のつぶやき

東澤 孝

(昭二九卒)

川柳つづけて六十年  
バカじゃなかるうか

この句おかしい ハハハ

うまいなあ 溜息が出る

皮肉 比喩 風刺かな

喝采が欲しくて川柳作った

諦めた 才能がない

退屈凌ぎに作っている

遊び あそび

句が作れなくなれば

ハイさようなら

近詠十句

拘ると人生観が継せてくる

右足を庇えば拗ねる左足

入り口で足踏みしてる福の神

傘寿きてまだ揺れている死性観

一線を守り孤独に耐えている

この歳で時には欲しい隠れ蓑

春風に叱られている無精者

腕組んだ仲間も今じゃ格差つき

性善説監視カメラが嘲笑う

拘りをすすると風が動き出す

☎ 799-0724

四国中央市土居町

蕪崎九〇二

絵手紙

鳥や草花と共に

田中 勝子

(昭五〇卒)

退職して、毎日が日曜日になつた。運動不足解消のため、歩きを心掛けています。風を感じながら、きよろきよると周りに目を向けていると、小さな発見が多くある。かつて、山の学校に勤めていた時のこと、カワセミがいるとの情報に、何度か走ったが、出合うこ

とはなかった。そのカワセミに、家の近くの川で遭遇した。小さい姿ながらも、羽色の鮮やかさで、圧倒的な存在感があった。それからというもの、散歩が、より意欲的になってきた。のんびりとしたカモの親子の行列や、バシャバシャと騒々しいコイの産卵シーンなどが見られて、川辺は、特に興味深い。  
ある日のこと、我が家の庭先でも、驚きの発見があった。野鳥が椿に営巣していたのだ。図鑑で調べると、モズであつた。それにしても、何と粗末に見える巣だこと。無数のビニールのひもが垂れ下がっており、思わず笑ってしまつた。いったい、どこで拾ってきた

のだろう。モズは、漢字で「百舌」と書き、他の鳥の鳴きまねが得意らしい。そう言えば、春先に、ウグイスに似た奇妙な鳴き声を、布団の中で聞いたが、あれは、うちのモズのサービスだったかも。人間社会と共存したがつているようにも思えて、勝手に親しみを感じている。そこで、四苦八苦しながら、下手くそなモズの絵をかいてみた。  
文句を言わない鳥や草花を見ている心が和む。そして、気が向けば絵にして楽しんでる。

☎ 791-3102

伊予郡松前町北黒田

七三八



俳句

ふるさと春

佐々木皓一  
(昭三〇卒)

寒満月蒼天一朶の雲もなし

春近し五百羅漢の思案顔(旅行)

末黒野や阿蘇中岳のうす煙

(旅行)

立春や夜べに撒かれし辻の豆

春の潮汐入り川を廻りけり

荒東風や荒磯をまろぶ石の音

しかとある棘の支へや山椒の芽

引き潮の忘れ溜りやがうな群れ★

遠霞岬十里や風わたる

一寸の芽出し春筍掘られけり

斧入れぬ古城の森や囀れる

萱ぶきの鐘撞堂やうらゝかに

(仏木寺)

見知らねど交はず会釈や彼岸墓地

長閑さや干網浜の眠り猫

さまざまの思ひ出桜閉校す

(宇和海)

★「がうな」 寄居虫

798-0043 宇和島市宇和津町

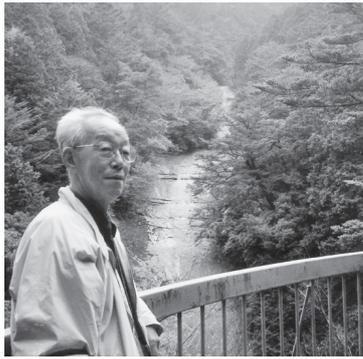
三一二



＊ ＊ ＊

愛大生の頃から俳句に多少の関心をもっていた。子規や山頭火も好きだった。色々な句会に誘われながら遊んでいた。郷里宇和島に就職し退職前になって「渋柿」句会に入会し四代目主宰米田双葉子先生の教えを受けることとなった。

双葉子先生の尊敬された松根東洋城の主張「芭蕉に帰れ」の意義を学びながら漱石・子規の俳句を学習した。いまだわかつてはいない。ただ「情」を込めての教えを追求している。



滑床雪輪の滝です

短歌

老いと介護



森貞 和雄  
(昭二五青師卒)

「奥さんは如何ですか」と訪ね来る人ありうれしこの町が好き

病む妻に替りて立てば厨房に

いつしか男の匂ひ漂ふ

CTも血液検査も異常なし

術後十年これにて卒業

オカリナに童謡吹きて病む妻の

心癒やさむ長き冬の夜

疲れたと口には出さず日に三度

命の綱の食の準備す

病む妻と共に唱ふは遠き日に

憶えし童謡・唱歌でありき

病む妻に替りて立てば大寒の

水は冷たし味噌汁を炊く

病む妻に替りて今朝も吾の炊く  
味噌汁の味妻の好みに

静けさは苦にもならねど寂しさは  
耐え難くしてCDかける

あの人は八十歳よ庭師言ふ  
脚立の上に松を摘む人

気の抜けたラムネのやうな  
吾が居てセピア色なる卒業写真

介護する人よりされる身の辛さを  
知り妻の介護に

米寿まであと千日を生きるぞと  
鏡の中の吾に声かく

791-0245 松山市南梅本町  
八八七一二



# 会員の声

## 「教育の再生」再考



吉原 宏文  
(昭四二卒)

思いがけなく同窓会常任幹事の菅田顕先生より会報への原稿を依頼されましたので、卒業生の一人として久しぶりに（平成元年二月以来）、七十二歳になった今日、心に抱いている感想を文章にしてみました。

広島県生まれの私にとって他県の愛媛大学に進学したことは、やはり何かの御縁であったと思います。愛媛県は俳聖正岡子規を生んだ文学の地であるとともにノーベル文学賞の大江健三郎氏、また昨年は青色発光ダイオードの開発でノーベル物理学賞の光栄に預られた中村修二氏を輩出した知的レベルの高い県であると思われま

聖地でもあります。現在、「ヒロシマ・ナガサキ」として、世界的に有名になり、人類の犯した罪業を懺悔し、平和を願う祈りが、毎年平和公園で開催されています。私は被爆時は三歳でしたが、広島県の山地に住んでいましたので直接の被爆は免れました。今は、その復興した広島市安佐南区の一角に住んでおり、昨夏八月の集中豪雨土砂災害で多数の死者を出した地区の中です。ただ、山側ではなく、太田川放水路の近くに家があるため被害はありませんでした。しかし、大変な衝撃を受けました。

私は、複雑な家族構成ながら、教育者一家の長男として生を受けましたので、何とはなく教育学部の門を叩くことになり入学を許されました。ただし、名門広島国泰寺高校在学中より、「教育」(education)よりも、「哲学」(philosophy)とか「宗教」(religion)に関心があり、愛大でも、「哲学科」に進みたかったのですが、肝心の英語ができなくて、初志を貫徹することができず、不本意ながら、小学校教師の免許だけ取って卒業せざるをえませんでした。中学校教師の副専を放棄したことは、自分の弱みとして苦悶しました。しかし、その後の哲学研究への「余地」(space)を残しておいたこととして、そのよ

うな空白観を抱いていたことは、かえって不幸中の幸いであったの

かもしれない。ともかくも、関係者の猛反対を振り切って、人生の絶対的命綱ともいべき四年間（大阪二年間・広島二年間）勤めた小学校教師の職を辞し、佛教学大学院（法然上人の浄土宗総本山知恩院）に進学し、仏教学研究の途についたことは、全く人生の「冒険」(adventure)以外の何ものでもありませんでした。当該小学校の東妻夫校長から「学校教育よりも深い宗教の道に進まれたのですから覚悟してがんばって下さい」との葉書をいただきました。佛大院では奨学金を受け、地の利から近くの京都大学へも足を運び聴講しながら五年間（修士課程二年間・博士課程三年間）学びました。修了後、薦められた浄土宗ではなく、親鸞聖人の浄土真宗の僧侶となつて、その後の大試練に耐えながら、七十二歳となった今も独身という孤独な人生を歩んできました。

それにつけても、「教育」が人間生活の営為にとつていかに重要で大切であるか、「教育」に関わつてきてよかつたと熟（つくづく）思う昨今です。私の今生での意味（meaning）と使命（mission）も分かつてきました。昨年のノーベル平和賞のパキスタンの少女、マララ・ユスフザイさんの「幼児教育（児童結婚）と女子教育（名誉殺人）が大切」という国連での演説に感動した一人です。若者が殺人や自爆テロへと容易に洗脳されていく現在、過激思想指導者・悪魔（Satan）に操られる教育力によつては、人間の心がかくも冷血・残酷に変貌していくものかという恐怖の現実

に直面している世界で「教育」の見直しが叫ばれています。神の領域に接近しているかのような今日の科学技術の長足の進歩による利便性追求の日常生活、経済至上主義、同時に教育にあつても知識の詰め込み最優先で、伸び伸びとした遊びを通して真の心の平安を説く教育が等閑視されてきたと感じています。

さて、戦前の旧帝大系諸大学のうち、戦後の学制改革で唯一、教員養成課程（旧師範学校）を純粹学問研究学部としての教育学部と併合した東北大学にあって、教養部扱いの、その職性分野との矛盾性から、暫くして、教員養成課程を切り離すべきだとの声があつたとき、それは教育の自殺行為だ、と猛反対された林竹二先生は、結局大学を追われ、その功績から新しく設立された宮城教育大学の初代学長に就任されました。林先生は東北大学教育学部で、ソクラテス、プラトン、アリストテレス等のギリシャ哲学の有能な研究者者でしたが、特に初等教育が大切であり、小学校教師になつていく学生達が、真の人間教育、真の教育哲学を学習し、本物の人間を見抜く眼力を養わねばならぬ、もちろん教科教育も大切ですが、教師の人間性が接する子ども的人格に反映され決定づけられるわけですから、まず第一に、真の人間教師を育成する教員養成大学へと脱皮すべきだ、と叫び続けられたのでした。「資格」を与えるだけの体制から「資質」の形成を重視する体制への変革を願われたのです。

しかしながら、小学校教育は、多様な教科に対応する技量を体得

せねばならないので、万能のスーパーマンならいざしらず、そこに無理が生じ、教職現場ではピアノのバイエル80番的低能力を覆い隠してでも一人前の音楽家ぶりを身につけ、創意工夫するより、平気でごまかしてしまふ大人びた氣質をもつ人間として、戦前から小学校教師を蔑称する「師範タイプ」なる形容詞を貼りつけられたのでした。「教育界」と自負し、広島高等師範学校を仰望する三原女子師範学校卒業の母から、特に男子師範生に、コンプレックスとしてその傾向性が強かつたようだと聞かされてきました。

今日、貧富の格差のますますの拡大によつて、強大国はIS等の不平不満分子を力（ちから）づくで一掃しようとする（りき）んでいますが、過激なテロ思想は消滅することなく世界中に拡散し、日本人もその「標的」(target)になり安心してはいられなくなつてきています。憎しみの連鎖は悪循環となり、究極的には、「阿弥陀仏」の慈悲による救済によつてのみ成就される調和への対話が唯一の理想的方策として残されていると信じています。

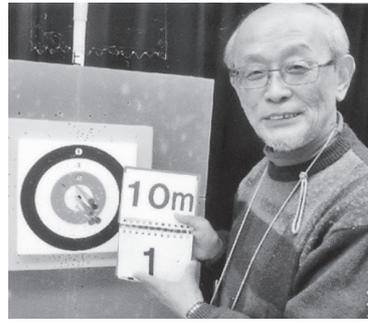
旅人のマントを脱がすのは、太陽の光と熱でしかありません。平成二十七年（二〇一五）年二月二十七日（父の祥月命日にて）

参考文献  
教育亡国（林竹二著・筑摩書房）  
私の小学校留學記  
（武田忠著・NHKブックス）  
わたしはマララ（マララ・ユスフザイ著・GAKKEN）

731-0135  
広島市安佐南区長束一丁目一八一五

# 蒲池先生のお名前に 目がとまり……

森川 紘一  
(昭三七卒)



趣味のスポーツ吹き矢練習中

「同窓会報」一一九号に替地和人氏が「見つかった卒業文集」という一文を寄せておられた。(二十三ページ)  
その中に「蒲池先生」のお名前と「作文の会」という文字を見つけ、学生時代と現在がつながってしまった。

私は、昭和三十五年度の後期から蒲池先生に指導教官をお願いしたことから「作文の会」に入会して生活綴方を知り、卒業まで在籍して多くのことを学んだ。今も「会友」として機関誌「坊っちゃん列車」(年一回発行)に時々寄稿したりしている。

替地氏のそれを読んでいるうちに、「作文の会」で学んだことの一つで、現在(七十五歳)も「こだわり」続けていることをここに

紹介する気になった。  
当時読んだ二冊の実践記録書からもらった感動が、**夢**を誕生させた。

一つは、学級通信を発行したことで、父母から喜ばれたという感動的な実践だった。もう一つは、ベテランの先生が、親子二代を担任した時の、これもまた感動的な実践だった。

学生の私には学級通信の具体的なイメージはなかったが、発行への強い意欲が湧いた。更に、長く先生をしていると親子二代と会うこともあるのか、と実に新鮮な感動も味わったものだ。

この二つの感動が、私の中で一体となり、ステキな**夢**ができた。「教師になったら、学級通信を発行しよう！教え子の子どもに出会うことがあるかもしれないから、名前を変えずに、しかも通し番号で発行し続けよう！そうしていると、いつの日か二代目を担任した時、二代目が持ち帰った学級通信をばさんで親子が茶の間で盛り上がるに違いない。」そんなことを考えると、現場に出るのが楽しく



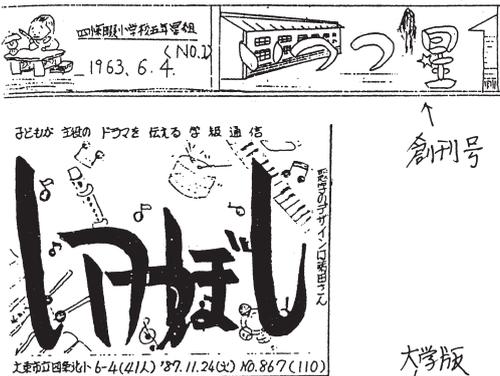
大学での講義中

しみになったものだ。今もその**夢**に「こだわり」続けている。現在、五十三年目である。

最初の担任は、大阪の四條畷小学校の**五年星組**だったので「いつつほし」と名付けてガリ版印刷で発行し始めた。一九六三年のことである。当時は、学級通信が珍しかったので大歓迎された。その後も続けたが、体調を壊したので、大事をとって五十三歳で退職した。一二〇〇号まで発行したのだが、二代目に出会う機会に恵まれず、学生時代の**夢**は実現しなかった。

退職後、体調も回復し、今までに七大学で非常勤講師を務めてきた。

最初の龍谷大学での初講義直前、突然ひらめいた。それは、「講義通信として『いつつほし』を発行してみよう。大学生の中に二代



創刊号

大学版



- 原稿募集
- 一次号 第百二十一号
- 短くても結構です。多くの方々のお気軽なご寄稿をお待ちしております。
- 「会員の声」・「今、教育に思うこと」について、ふるってご投稿ください。
  - ★ 同期会や支部同窓会などの集会や活動について
  - ★ 恩師・先輩・同僚の訪問や思い出について
  - ★ 職場の近況や所感や活動について
  - ★ 文芸(随想・俳句・川柳・短歌・詩・絵手紙等)について
  - ★ 会員便り
  - 1 旅行記 4 この頃思うこと
  - 2 季節便り 5 忘れ得ぬ人など
  - 3 教育雑感
- ※ 投稿が多数になった場合には、編集委員会で選ばせていただきますので、ご了承ください。
- ★ 原稿×切 十一月三十日
  - ★ 発行 二月一日 予定
  - ★ 字数
  - ★ 依頼者以外は千二百字厳守
  - ★ 四〇〇字詰原稿用紙の一行を十五字にして書いて下さい。
  - ★ 写真
  - ★ 筆者の顔写真を添付してください。顔写真以外で内容に関連した写真もあれば送ってください。

# 八十八ヶ所遍路で 四国文化を学ぶ



小野植元幸  
(昭二九卒)

とができた。  
設立以後、「四国遍路とこころの旅」ひめぎんサブホールでの四人のシンポジウム。  
愛大のホールでの開催。毎週日曜日午前九時より三十分「各札所」をテレビ愛媛が放映。  
第二回愛大ミュージアムでの

「千二百年展」があり、遍路道、所用品、木札、納札、絵ハガキ日記、御詠歌等。その中でも岩屋寺の柿経(木札)は印象に残った。  
内子町では「郷土学講座」平成二十六年九月三十日、愛大法文学部胡光教授、演題「最新の寺院調査成果に学ぶ」を聴講し、再度遍路と空海の歴史を学び、二回目の順拝に大変参考になっている。

平成二十六年十二月十二日NHK放送午後七時半から、午後九時四十五分「四国遍路のミステリー」胡光教授。香川県出身の松本明子氏(タレント)。作家家田莊子氏。脳科学者茂木氏のフォーラムを視聴。

作家の家田氏は、八年前松前文化会館にて「八十八ヶ所と空海」で講演を聴講。その折話す機会があり「ノーベル賞作家大江健三郎氏の生家前の旧遍路道を歩いた。」と話され、その時、すでに五回目の順拝されていたので、思い出しなつかしかった。

放映で、順拝の目的のアンケートより次のことが多かった。順不同である。

- (一)自分をみつめ直し、自分さがしの旅
- (二)家族の供養
- (三)病気の治癒のお礼
- (四)家族の安全祈願
- (五)自分を鍛える。

大山寺の資料一万七千点を、胡光教授のもとに学生が、約一年間かけて、調査に協力し多大の成果に感謝したい。  
現職時に順拝し、各札所の歴史を知っていれば、児童生徒に還元できたのと思う。

現職の先生方、多忙中をさつするが順拝すれば、四国文化の継承につながり生き方の指針になるのではと、順拝をして思うこの頃である。世界遺産に指定されることを願いながら。

喜多郡内子町五百木  
一五四



衛門三郎が弘法大師に会った像

## 放送大学入学生募集のお知らせ

放送大学では、平成二十七年十月入学生(教養学部、修士選科生・科目生)を募集中です。  
〔募集期間〕六月十五日～九月二十日

平成二十八年度大学院修士全科生学生を募集中です。  
〔募集期間〕八月十六日～八月三十日十八時必着

放送大学は、テレビなどの放送を利用して自宅で学べる通信制の大学です。

放送大学では、心理学・福祉・文学など、幅広い分野を学べますが、同窓会員特に現職の方々には、次に掲げる教育関係の免許資格取得などができます。

○ 放送大学の大学院を利用して、専修免許状の取得が可能です。

○ 放送大学の科目を利用して、特別支援学校教諭免許状

の取得が可能です。

○ 放送大学の科目を利用して、司書教諭資格の取得が可能です。

○ 放送大学の講習を受講して、教員免許更新が可能です。

資料を無料でさし上げておきます。お気軽に、愛媛学習センターにご相談ください。



# 放送大学

教育に関連する科目を多数開講しています  
一科目からでも学べます  
平成27年度10月入学生募集中!  
(平成27年9月20日まで)  
愛媛学習センター  
(愛媛大学内)  
TEL 089-923-8544

# 同期会

## 昭和三十三年 卒業生同期会

村上 嘉一  
(昭三三卒)

平成二十六(二〇一四)年十一月三十日(日)、十三時三十分～十七時、松山市道後姫塚の「にぎたつ会館」において、昭和三十三年(一九五八)年三月に教育学部四年課程を卒業した同期生の会が開かれた。

卒業後、早くも半世紀をこえる年月が過ぎ去り、同期生も八十歳が近くになった。正に「光陰矢の如し」である。

資料によれば、同期生(四年課程中等科・初等科卒業生)の総数は百五十三名であった。今回は、そのうち二十八名が参集した。

この会は初回を同期生・長岡芳朗さんが発起・世話をし、松山で開かれ、現在に至った。その後、ほぼ年に一回のペースで、会



場・事務局を東予・中予・南予・県外の岡山へ移して開かれ、早くも十四回を迎えた。

今回は南予の佐々木信之さんと後藤和市さんが準備・開催・運営にあたった、会の事務局の仕事は松山の永井保雄さんがお手伝いすることで開会に至った。

宴会開会にあたり、まず全員で



愛媛大学教育学部 昭和33年卒業 第14回同期会 平成26年11月30日 於にぎたつ会館

今は亡き友へ黙禱し冥福をお祈りした。

佐々木さんの発声で開会。久し振りに再会した友の皆さんとの乾杯の音頭は遠路出席くださった神頃さんの発声に合わせて一同元氣よく唱和し杯を上げた。

佐々木さんの準備したオーディオから流れる昔日の懐かしい文部省唱歌「ふるさと」や「愛媛大学学歌」などのメロディの流れる中あちこちのテーブルで歓談の輪が広がり宴たけなわとなった。

皆さんの「近況報告」が始まった。「魚(さかな)が大好きで、魚扁(へん)の付いた漢字を集め調べている」、「毎日スクワットを百回して強い脚力でテニスを楽しんでいる」、「野菜作りを楽しみつつ法律の勉強もしている」、「現在、囲碁六段、益々、意気盛んです」、「趣味のオリガミを楽しみ、愛大の健康講座にも参加している」、「英語教室に出席し勉強している」、「お医者さんに縁がなく全国大会に出て走っている」、「庭の手入れが発展し女性の剪定士に教えていただいている」、「何回も手術を受けたが元氣でこのように生きている」……などなど、それぞれ

のカラフルな現況報告に一同感心したり、微笑んだりのひとときとなった。

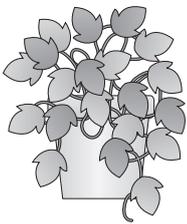
次回の会はどこで開くか。岡山から参加した河合さんから「ぜひ、松山で……」との提案があり、そのように決まった。

あちこちのテーブルで談笑・交流が続く中にお開きの時となった。

一同の健康と多幸・同期会の益々の発展を祈念して、元氣で再会しようとい近い誓い合い、万歳を三唱した。

『欠席者からのメッセージ』が五十通届いた。「えひめ国体の諸準備係を担当しています」、「居合道五段をもらい六段をめざして頑張っている」などの「元氣」便りに加えて、二十通は何らか体調不良に関するものであった。

同期生の皆さんの健康回復を祈り元氣で再会できることを期待しつつ散会した。



### 教育現場等から同窓会へ 支援要請依頼について

教育現場等で、同窓会へ支援のご要望がありましたら、左記のような内容で、同窓会へご連絡下さい。

1. 支援要請のねらい
  2. どのような事を
  3. 何時頃
  4. 何処で
  5. 誰が、どのような組織が
  6. どのような方法で実施する
- その為、同窓会からの支援を要請したい。

要請連絡は、左記の所にメールして頂くか、FAX又はお手紙をお送り下さい。

教育学部同窓会  
インターネット  
開設しています!

↑  
メールアドレスは上記

お問い合わせ、会報への寄稿、住所、勤務先変更などの諸連絡にご利用ください。お待ちしています。

[dosokai@ed.ehime-u.ac.jp](mailto:dosokai@ed.ehime-u.ac.jp)

## 松山市立久枝小学校の 1/2 成人式記念品制作 『藍染めハンカチに手形で抜き染め』を行いました。

学部トピックス

平成27年3月13日(金)、愛大G P「伝統の継承プログラムを通したグローバルマインドの育成」事業として、松山市立久枝小学校の1/2成人式記念品制作『藍染めハンカチに手形で抜き染め』を行いました。

平成25年度から愛大G P特別テーマとして立ち上げられた「伝統の継承プログラムを通したグローバルマインドの育成」事業を、久枝小学校の1/2成人式の手形を抜き染めした藍染めハンカチ製作として行いました。

「伊予餅」の伝統を持つ愛媛県ですが、そうした伝統への興味関心は薄れていっています。そこで、伝統の継承プログラムの検討を通して、地域性について考えを巡らし、ローカルとグローバルの融合されたグローカリゼーションについて思いを巡らせることが本事業の目的です。

今回は、2代目学生リーダーの和田敬行さん(教育学研究科1年)を筆頭に、神森貴文さん(同研究科1年)、橋本愛さん(同研究科1年)、風呂圭祐さん(同研究科1年)、市本早香さん(教育心理3年)、寺西順平さん(家政教育3年)、森元愛咲子さん(理科教育3年)、吉金みのりさん(理科教育3年)の8人で実施を行いました。

楽しみながら伝統産業に触れ、伝統を身近に感じるハンカチ製作を通し、子どもたちと学生、地域が一体となって、伝統の新たな継承方法について考える機会となりました。簡単に、楽しく、活動ができ、子どもたちは一様に「楽しかった!」と喜んでいました。子どもたちの笑顔に見送られて、学生たちは新たな気づきを得たようです。

伝統の新たな価値創造や地域を担う人材の育成が期待されます。



リーダーの和田さんが児童たちに実施内容を説明



手形を押ししています。後ろは前のクラスが製作した手形



への誘い

種 類	展示
日 時	2015-05-15
内 容	特別展「体感する4次元宇宙の世界」の開催
詳細情報	<p>5月20日(水)から、特別展「体感する4次元宇宙の世界」を開催いたします。</p> <p>国立天文台のご協力により、4D2Uプロジェクトチームが開発した4次元宇宙シアター用のムービーから、進化する宇宙の姿を立体的に体感していただきます。また、愛媛大学宇宙進化研究センターが取り組んでいる、最先端の天文学研究を紹介します。</p> <p>会期は7月27日(月)まで。是非、ご来館ください。</p>

## 今治市教育委員会と連携協力事業の調印を行いました

平成27年4月20日（月）、教育学部が今治市教育委員会の高橋実樹教育長を迎え、同委員会と平成27年度連携協力事業の調印を行いました。

教育学部はこれまで、愛媛県教育委員会、松山市教育委員会、今治市教育委員会、伊予市教育委員会、松前町教育委員会、東温市教育委員会、愛南町教育委員会とそれぞれ連携協力の覚書を交わし、その活動を通して、教育研究、教員研修、教員養成について多くの成果を挙げてきました。

今治市教育委員会とは、平成15年の覚書の調印以来、継続的に共同研究を行っており、『研究報告書』（愛媛大学教育学部・今治市教育研究所）の形でその成果をまとめています。今年度は、昨年度に引き続き「確かな学びを保障するカリキュラムの開発と授業の創造」のテーマで研究を推進することになりました。その趣旨は、「教育現場の諸問題の解決のために、理論と実践の一体化による研究を推進するとともに、教師の創意工夫を活かした授業を創造し、児童生徒に多様で確かな学力を身につけさせる」というものです。

教育現場の具体に即した継続的な研究の成果が期待されま



今治市教育委員会の高橋教育長（左）と三浦和尚教育学部長（右）

## 教育学部留学生歓迎会を開催しました【4月23日(木)】

平成27年4月23日(木)、校友会館2階「サロン」で、教育学部留学生歓迎会（前学期）を開催しました。

本学部では、今年度4月から新たに3人の留学生を迎え、在籍する留学生は現在6人となりました。

歓迎会は、留学生、教育学部長、指導教員、国際交流委員会委員、留学生チューター、事務職員などが一同に集い、国際交流委員会の河野極特命准教授の司会のもと、三浦和尚教育学部長の歓迎挨拶、乾杯で始まりました。その後、留学生の紹介があり、留学生たちは、それぞれ流暢な日本語で自己紹介を行いました。続いて、国際交流委員会メンバーの自己紹介があり、先輩留学生から、授業や日常生活などについてアドバイスとエールがありました。

留学生の皆さんにとって、本学で過ごす留学生活が有意義なものになるよう願っています。



学部長による乾杯



留学生から挨拶

平成27年度  
支 部 長 会 報 告

1. 日 時 平成27年6月6日(土) 10:30～14:00
2. 場 所 愛媛大学校友会館(松山市文京町3) 2F 大会議室
3. 日 程 (1) 開 会 挨拶 会長・学部長  
(2) 各支部長 挨拶  
(3) 議長選出  
(4) 議 事  
ア 会則改正について  
イ 役員改選に関する件  
★ 新旧役員挨拶  
ウ 平成26年度行事報告  
エ 平成26年度決算報告・監査報告  
オ 平成27年度行事計画  
カ 平成27年度予算案審議  
キ 支部活動と助成金について  
ク その他事務連絡  
(内規に関する事項・会報発送・会館利・名簿 等)
- (5) 閉 会 挨拶 副会長

#### 4. 主な話し合い事項

(1) 支部活動の活性化について

各支部長に前もって依頼していたアンケート等による提言を元に、支部活動をいかに活性化するかについて時間を掛けて話し合われた。昨年度も南宇和支部、伊予支部で「落語文化の普及を図る」のかけ声の下、地域の方々と協力し、古今亭菊志ん師匠をお招きし、大変盛会だったので、その経過報告を松本支部長にしていた。

このように各支部とも予算が位置づけられているので、積極的な活動を公民館等と協力して計画してみようとの提言があった。

(2) 教育学部と同窓会との連携活動について

一昨年度より予算にも位置づけ、教育学部では「サポーター制度」を設け、同窓生に働きかけ、講師になってもらい「コミュニケーション能力の育成」をテーマに、学生達に講演している。その活動の様子報告は会報を通じて行っている。非常に学生に好評であり、今後とも学部と同窓会との絆を強めるため同窓会は協力をしようと意志決定した。

(3) 「支部活動特別助成金」について

支部活動をより活性化するための具体的な方策として、上記にある「支部活動特別助成」を配慮している。その為の資料として、「支部活動特別助成金交付要綱」と「申請手続き」を紹介した。

(4) 県外支部長の参加があった

岡山支部・富田一廣副会長の参加があり、挨拶をして頂き、県外支部活動の現状と要望を話していただいた。

(5) 今年度新しく、4人の新理事をお迎えした。理事選出も東・南予からも、もう少し多く選出してはとの意見があった。

(6) 今回に於いても来る愛媛国体に備え、同窓会としてもどうサポートするか考えてほしいとの提案があった。

以上

平成26年度 行 事 報 告

平成27年度 行 事 計 画

Table of activities for Heisei 26, including dates, event names, and participant counts.

Table of activities for Heisei 27, including dates, event names, and participant counts.

平成26年度 決 算 書

平成27年度 予 算 書

(収入の部) (単位：円)

Income statement table for Heisei 26 with columns for item, budget, actual income, change, and notes.

(支出の部)

Expenditure statement table for Heisei 26 with columns for item, budget, actual expenditure, change, and notes.

(収入の部) (単位：円)

Income statement table for Heisei 27 with columns for item, budget, previous year budget, change, and notes.

(支出の部)

Expenditure statement table for Heisei 27 with columns for item, budget, previous year budget, change, and notes.

# 平成 27 年度 役 員 表

愛媛大学教育学部同窓会

本	顧問	三浦和尚・奥定一孝		監事	矢野裕司		常任幹事	替地和人
	会長	高橋治郎			相原孝裕			
部	副会長	立入 哉	峯本高義	村上朋子	菅田 顕		山本千鶴子	
	理事	山本周三	長野照道	山下雅司	菊川國夫		満田泰三	
		村上嘉一	鎌田サチ子	和田和子	阿部 晋		垂水葉子	
		井出節雄	後藤陽三	中村真紀子	大上航太		辻井芽美子	
		白石久美子	赤松彩子	渡邊恵理	菅 洋二		濱田 圭	
	山本真理	森山由香里						

県	支部名	支 部 長		副 支 部 長		副 支 部 長	
	内	川之江・新宮	後藤宏治	川之江南中	石川直子	南 小	日浦正文
伊予三島		鈴木恵子	豊岡小	野村 浩	松柏小	井川幸子	松柏小
土 居		越村慎治	関川小	細川真弓	北 小	一柳直宏	関川小
新居浜		佐々木篤志	新居浜東中	中野 久	惣開小	高橋美鈴	泉川小
西 条		曾我部研二	橘 小	吉岡健二	神戸小	美濃孝枝	橘 小
東予・周桑		磯 明	小松幼	青野信樹	西条小		
今 治		高井 剛	鳥生小	高橋隆司	今治市教	八木良二	国分小
今治・越智		橋本直行	岩城小	菅 昭彦	大三島小	長島章子	生名小
松山・北条		三好尊史	立岩小	川崎 豊	浅海小		
松 山		矢野裕司	和気小	城本すみ江	新玉小	森 健	勝山中
東 温		今西俊介	西谷小	高須賀秀喜	北吉井小	藤原雅彦	拝志小
伊 予		篠崎邦裕	砥部中	吉田京子	郡中小	浅山 貢	伊予中
上 浮 穴		橋本佳史	美川小	段王繁嘉	久万小	大高茂範	美川小
大 洲		餘家幹子	三善小	菊地啓二	平野小	原田淳子	新谷小
喜 多		谷口利光	小田中	清水輝昭	小田小	山田眞市	大瀬小
八幡浜		二宮あさみ	江戸岡小	甲野正人	神山小	兵頭 弘	真穴中
西 宇 和		大久保 孝	水ヶ浦小	末光礼子	三机小	竹上正也	三崎小
西 予		三浦倉充	明浜小	井上 健	遊子川小	大西元二	明浜中
宇 和 島	今井正雄	遊子小	石丸光計	高光小	片岡真由美	遊子小	
北 宇 和	西村久仁夫	日吉中	小川俊一	日吉中	藤原恵美子	松野中	
南 宇 和	松本清隆	篠山中	中川公詞	家串小	清水美和	船越小	
支	附 属	山本真理	附特別支援				

県外支部	東 京	兼頭吉市		山下正洋		森 孝枝	
	京 都	河野直樹					
	大 阪	神垣鉄雄		本宮 久		杉山容子	
	神 戸	木原孝造		平山 昇		加登康智	
	岡 山	神崎順治					

編集委員	菅田 顕	峯本 高義	菊川 國夫	村上 朋子	山下 雅司	替地 和人
------	------	-------	-------	-------	-------	-------

寄贈図書

業の主體

吉原宏文

「業の主體」

著者 吉原 宏文
発行所 浄土真宗広島学庫
印刷所 呉正印刷株式会社
製本所 呉正印刷株式会社
判型 一八×二五・五サイズ
寄贈者 吉原 宏文



会報送料・寄付者名

平成27年2月5日

敬弔

(物故会員)

齊藤 俊彦 戒能 申脩 上窪 美鶴 原綾子 林順子 井上下文 山明子 尾上昌子 岡野正義 大野宏明 合田勝彦 須之内百合子 徳野正夫 河野圭子 末光嘉代子 藤原八重子 宝来 皆江 竹野 貞光 田坂 千恵子 佐々木 高許 池田 桂文 白石 英稔 篠岡 智裕 古岡 裕至 西田 利朗 池川 宏文 吉原 里美 浅井 美誠 藤原 誠

26.12.30 26.12.30 26.12.29 26.12.28 26.12.24 26.12.22 26.12.22 26.12.22 26.12.17 26.12.17 26.12.11 26.12.9 26.12.8 26.11.17 26.11.12 26.11.11 26.11.11 26.11.18 26.11.10 26.11.28 26.1.12 (死亡年月日)
(氏名) 吉田長生 原廣 國弘 坂本昭 坂本昭 相田孝昭 佐伯輝宣 水口義一 田中芳夫 田内逸信 大西高士 大西高士 渡邊安富美 南昌治 徳本ユリ子 山本淳子 山本淳子 吉田信保 吉田信保 長俊蔵 長俊蔵 松本ヤスエ 白石信一 清水信一 関谷宗一

27.3.7 27.3.2 27.2.25 27.2.23 27.2.17 27.2.15 27.2.15 27.2.11 27.2.10 27.2.7 27.2.7 27.2.7 27.2.3 27.2.27 27.2.24 27.2.24 27.2.20 27.2.14 27.2.10 27.2.7 27.2.6 27.12.31

井上哲夫 今井嘉幸 橘宏和 稲積洵熹 富永経子 (昭25・青師女子) 池内嘉子 清家護 新家賢 新山賢 上甲健 大浦健二 印南秀克 野首恒明 河野重雄 大河光造 (昭26・青師女子) 和田ミツ子 土野愛之 三井本前 野戸司郎 大内壽美子 真鍋寛 得居孝子 五十崎朗

27.5.13 27.5.5 27.5.4 27.4.28 27.4.26 27.4.23 27.4.21 27.4.19 27.4.11 27.4.10 27.4.5 27.3.28 27.3.26 27.3.25 27.3.25 27.3.25 27.3.23 27.3.19 27.3.19 27.3.11 27.3.10

滝澤愛大 (昭29・愛大) 宮内ミウラ (昭11・本科二) 越智優 (昭18・女子青師) 平家マサミ (昭21・愛師女子部) 岡本晴子 (昭26・愛大) 高田澄大 (昭29・愛大) 久保嘉幸 (昭19・愛師女子部) 片野栄 (昭29・愛大) 友澤敏男 (昭17・本科) 齊藤光 (昭35・愛大) 白石純士 (昭22・本科二) 渡辺義一 (昭60・愛大) 河合浩一 (昭29・愛大) 松浦幸己 (昭25・本科) 菊池勝 (昭24・青師) 片岡敏功 (昭19・本科) 菅茂晴 (昭13・本科二) 長谷和英 (昭28・愛大) 大野直大 (昭29・愛大) 伊賀上洋子 (昭24・本科) 中村文雄 (昭24・本科)

愛媛大学と山形大学で「第5回卒業・修了合同美術展覧会」を  
サテライトオフィス東京にて開催しました

【展覧会概要】

- 会 場：サテライトオフィス東京（東京都港区芝浦3-3-6キャンパス・イノベーションセンター）
  - 参 加 者：29名（愛媛大学10名、山形大学19名）
  - 開催期間：2015年3月4日（水）～3月7日（土）
- 3月4日：搬入・設置、ギャラリートーク      3月5日：交流会      3月8日：撤去・搬出

【展覧会の様子】



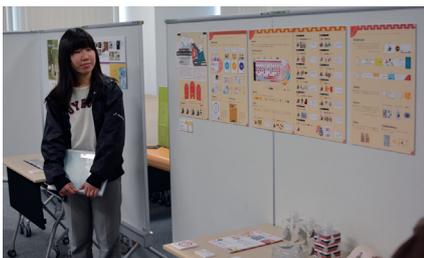
愛媛大学学生作品



愛媛大学学生作品



愛媛大学学生作品



ギャラリートークの様子



ギャラリートークの様子



ギャラリートークの様子



交流会の様子



受付の様子



山形大学との集合写真

【展覧会を終えて】

2015年3月に第5回となる卒業・修了合同美術展覧会を開催することができました。愛媛大学からは教育学部芸術文化課程造形芸術コース8名と学校教育教員養成課程美術教育専修2名の合計10名の参加がありました。今年度は愛媛大学がポスター作成などを担当し、山形大学の学生と展覧会の開催に向けて業務を分担しながら準備を進めてきました。合同展覧会を終えて、愛媛大学の学生の感想には「自分では思いがけないようなテーマ、画材をもちいていたり、同じような出発点からまったく違う終着点にたどり着いていることが大変興味深く、自身の刺激になりました。」や、「山大の人の作品は今まで、私たちがつくってきたものと全くちがって、こういうものをつくっても良かったんだと刺激になりました。3回生・2回生でも見に行けたら行けばよかったです。」などがありました。こうした感想からは、山形大学の学生との作品を通じた交流を行うことで、自身のこれまでの取り組みや作品について客観的に振り返る機会を獲得し、卒業研究における自己評価を深めることができたとはいえるのではないのでしょうか。最後になりましたが、本展覧会を開催するにあたりご尽力を頂いた菅田顕氏をはじめとした同窓会の皆様、ならびに関係者の方々にこの場を借りてお礼申し上げます。